

生命を語る 第一卷 目次

はしがき

多くの人びとの経験することであろうが、私もまた子供のころ、ある夜の闇のなかで、いま寝ている自分が、たったいま死んだらどうなるのだろうか、ふと考えたことがある。もちろん、なんの答えも得られるはずもなかったが、未知の闇のなかに生命の神秘幽遠ゆうえんの世界を垣間かいま見る思いがし、漠然ぼくぜんとした恐怖に身震みふるいしたことを、記憶に刻んだ。以来、自我の芽ばえとともに、生と死、生命の問題は、私の心奥深く根をおろして、年輪を印しるしたようである。

長じて胸を病んだ私には、しばしば死の予感との戦いが、日常のなかでくりかえされていた。死はきわめて近くにあった。当時、この地上での文字どおりの地獄の戦争が、つぎつぎと兄たちの生存を奪い去った。青春時代に死を近くに凝視ぎょうしして過ごした私が、いつか詩境を求め、またベルグソンの生の哲学に魅ひ

かれたというのも、いまにして想えば、むしろ、とうぜんの成り行きであつたのであらう。

私が日蓮大聖人の仏法哲学と巡り会つたのも、まことに宿命的なものだつたといつてよい。それは、それまでの仏教という抹香くさい既成宗教の枠を、まったく超えていた。この仏教の教える生命哲理の実践による人間革命の道を歩みはじめた瞬間から、今日の私の人生コースは、はつきり決まっていた。以来、弱い身体を叱咤し、変革しつつ、東に奔け西に走る激闘の年月がつづいたが、「生死」の問題は私の脳裏を、一瞬も離れることがなかつた。いつの日か、この命題を徹底して掘りさげ、世の人びとに訴えていくことを、私の最大の念願として抱いてきたのである。

時あつて、自己を振りかえるということは、おそらく人間だけに許された特権であらう。だがそれは、いうのはやさしいが、行なうのはいかにもむずかしいことである。日々の煩雑な瑣事が、人間にふとみずからを顧る余裕のひとときをもつことさえも奪ってしまう。また、現実社会の激越きわまる生存競争

は、人間の心の潤いをも干からびさせてしまうこともたしかである。アニマルと罵られながら、ひたすら経済競争に明け暮れてきた戦後の日本は、まさに、この人間本来の権利を放棄してきたのかもしれない。

経済発展、技術革新にしか目を向けなかった、馬車馬のような人間にも、人間が人間であることを自覚する英知が、いつか蘇りはじめたのであろう。最近の人心地ついた社会の情況は、ようやく、自己の省察、人生の意義の模索に向けられはじめたように、私は感じている。人間が人間であることを取りもどすための、本気の努力を開始したのであろうか。まことに、人間が、一個の生物としての繫縛を超えて、より広く、大きく生きていくには、生命の意味、本質を思索し、把握しぬいていく以外にない。

私が二人の青年と、『大白蓮華』誌上で「生命論」の対話をはじめたのは、こうした、私の内的遠因と外的誘因が、年輪のなかで熟しはじめてきたからである。拙くてもいい、人間が人間を取りもどす作業の第一歩を、印さねばならないという、信仰人としての責務からでもある。もちろん、これで生命のすべ

てを語りつくしたとは、さらさら思っていないし、そうした性質のものでもない。あくまでも、座談調のものであり、本格的な生命論の助走のつもりでいる。

こういう最中さなかに、潮出版社から、過去の連載をまとめて一冊の書にしたいと懇望こんぼうされたとき、いささが躊躇ちゅうちよしたのだが、この書がわずかでも、親愛なる読者の思索の糸口にでもなってくればと希ねがい、厚顔にも承諾したしだいである。

いまの日本の社会においては、庶民が気軽に哲学を語り、人生を論ずる場や素材が、あまりにも貧しい。この書を材料に、いくらかでも庶民による生命対話の輪が広がっていくならば、私にとって、喜びこれに過ぐるものはない。

最後に、本書の出版にあたり、数かずお骨折りくださった潮出版社の方がたに、深く謝意を表するしだいである。

昭和四十八年二月十八日

池田大作

はしがき 1

身体と心

生命の不思議な姿 13

「色法」の世界について 23

心の深層をさぐる 41

自然のなかの人間

Only One Cosmos 59

——かけがえのない宇宙

環境と適応 74

生命のなかの交流 93

生命をとらえる眼

夢の実体は？

113

11

57

111

変転きわまりなき世界Ⅱ 仮Ⅱ 119

時空の枠組みを超えるⅡ 空Ⅱ 135

一貫して不変の「我」Ⅱ 中Ⅱ 152

時間の謎

万物は時を刻む 163

生命的時間について 175

瞬間と永遠 191

宇宙の源流

宇宙はどういう姿をしているか 211

生命空間について 224

「久遠」と「久遠即末法」の原理 232

対話者

川田洋一

（昭和12年3月、香川県に生まれる。昭和37年、京都大学医学部を卒業。同大学大学院、同大学医学部助手を経て、現在、聖教新聞論説委員、創価学会学術部副部長。医学博士、専門は免疫学。編著に『公害問題入門』『人間医学への道』など。）

北川昌宏

（昭和15年7月、大阪府に生まれる。昭和39年7月聖教新聞社に入社。大阪大学理学部4年中退。現在、聖教新聞社書籍編集局次長、創価学会教学部副教学部長。）

身体と心

生命の不思議な姿

——最近、アメリカの科学者たちの書いた『生命の秘密』という本を読んだのですが、そのなかに、つぎのような一節がありました。

「この世界に三つの謎——なぞ——しかも根本的な三つの謎があるという。それは、一つは宇宙とは何か、二つには物質とは何か、そして第三には、生命とは何かという謎があるという」との書き出しではじまっているのです。

この本は、これら三つの謎のうち、生命とは何かという課題に挑んでいるわけですが、あらゆる現代科学の粋——すい——生化学の成果を中心にしてですが——を集めて、ひとたびは「二十世紀後半の科学者たちは、生命が、すでにその『神秘性』を失ったことを、生命の神話は、遠く歴史の座に去ったことを宣言す

る」といいながら、そのあとがおもしろいんですね。「しかもなお、生命の神秘は、新しい装いよそおのもとに、深く、遠い」とつづくのです。そして、そのあとでもう一度、科学者の自負心が顔をだすのですが、私には生命の神秘に立ち向かった科学者たちの深い嘆息たんそくが聞こえてくるように思われます。

池田 生命は、どこまでいっても神秘につつまれ、むしろ、知れば知るほど、その神秘さは、深まりと広がりを増すということでしょうね。

—— たしかに、科学者たちが苦闘し、科学が、発展を遂とげれば遂げるほど、生命は、明らかになる部分が増すとともに、その不思議さも、増していくようです。科学は、生や死の秘密を解決するのではなく、さらに、不思議な種々の様相ようそうをとりだしてみせるために進歩しているような気さえしてきます。

私たちの周囲には、草木あり、小動物あり、また、目には見えませんが無数の微生物ありで、それらが、独自の個性を発揮しつつ生命活動を営んでいます。そのような生き物たちのなかには、人間の想像もおよばないような生存の形を示すものがあります。

たとえば、東大の微生物学者^{びせいぶつ}たちは、油田のなかから石油を食べて生きる細菌を発見しています。これら地下の住人は、地中深く二千メートルの暗黒の世界に住んでいました。とうぜん、酸素^{さんそ}などはないわけです。では、どのようにして呼吸をしているのかというと、硝酸^{しょうさん}という劇薬^{げきやく}を分解して、そこから酸素を摂取しているというわけです。

また、最近、新聞でも報道されましたが、ソ連の地球物理学者チュジノフ博士が、二億五千万年前に形成されたカリ鉱石のなかから、ある種の微生物をよみがえらせています。おそらく、二億五千万年ものあいだ、鉱石のなかに閉じ込められてきたであろうその微生物が、培養液^{ばいようえき}のなかに入ると、動きだし、増えだしたと報告されています。このような生き物の存在をみつけたのも、科学の進歩のたまものであるわけですが、そういう事実を知れば知るほど、生命とは、なんと不思議なものだろうと思わずにはおれません。

——微生物といえば、近ごろ話題にのぼっているのが、水銀を食べる細菌ですね。発見者は、外村健三博士ですが、その細菌には、ほそ長いべん毛^{もう}があ

るといいます。オタマジャクシのシッポを長く細くしたような形をしています。「細菌K62」という学名がつけられました。水銀化合物は人間にとっては猛毒で、とくに、メチル水銀は、水俣病の原因となる物質です。^{みなまた}このような猛毒を食べて生きているというのですから、変わった生き物がいたものです。そのほか、鉄やマンガンを食べる微生物もいます。鉄を食う細菌、つまり「鉄細菌」は、鉄鉱山や鉄分の多い川や沼にいますし、マンガンを食う細菌は、火山灰でできた土地の水のなかにいます。こういう生物を科学者たちは「ゲテモノ食い」と呼んでいます。人間にも変わったものを食べる人がいますが、これらの細菌の食欲にはかなわないですね（笑い）。

細菌よりも小さいウイルスとなると、おもしろさも、いちだんと増してきます。ウイルスというのは、生物としての反応を示すわけですが、同時に状況に応じて、食塩と同一ような結晶にもなるのですね。結晶は、完全に無生物ですから、ある状況下では、ウイルスは、無生物と同じ様相を示すわけです。ところが、その結晶を栄養分の入った液にとかして、植物や動物の細胞に植えつけ

ると、このこと動きだして、さかんに増えはじめるのです。

スタンレーという学者が、世界ではじめてタバコモザイク・ウイルスを発見したときには、当の本人がわが目を疑ったといひます。これはタバコの葉にタバコモザイク病という病気を起こさせるウイルスなんですが、結晶と生物の間を行ったり来たりしているわけです。雪の結晶や食塩と同じような無生物だとばかり思っていた物質が、生物としての活動をはじめたのですから、驚くのも無理はない。ウイルスは生物とすべきか、それとも無生物と考えるべきか——ハムレットにも劣らぬ悩みにおそわれたと思います（笑）。考えあぐんだすえ、ウイルスは条件に応じて生物にもなり、無生物にも“変身”しうることを、ありのままに認めようということに落ち着いたそうです。

池田 生命は、じつに多様なあらわれ方をするものです。科学が長足の進歩を遂げるにつれて、ますます、複雑くわんざうにして多彩たさいな生命の姿が、うきぼりにされていくと思う。そこには、物理学的次元でとらえられる現象もあれば、それとはまったく異なった生物独自の営みもあるでしょう。また、人間生命のように

精神の特有な働きもある。

私たちは、生命活動といえば、ただちに、酸素を吸ったり、筋肉を動かしたり、おいしいものを食べたりすることを考えがちだね。恋人とデートすることだけが、生命活動だと信じている青年もいるかもしれない（笑い）。

だが、それらは、多彩な生の営みの一つの現象にすぎない。いろいろな生物のなかには、いかにも私たちの常識を越えたものがあるが、所詮、それらすべてを包含したのが、ありのままの生命の姿なのです。

植物が、地球上に降りそそぐ太陽のエネルギーを利用し、大気中の炭酸ガス、水、無機養分などから、有機化合物と酸素をつくりだす光合成を行なうのも生命の働きであれば、マメ科の植物の根に寄生する微生物が、根からエネルギーを得ながら大気中の窒素を集めて窒素化合物をつくるのも、生のあらわれにほかならない。春の訪れとともに、草木がかれんな花を咲かせるのも、秋が深まって果実がたわわに実るのも、大地と自然のリズムにもとづいている。ヒグラシが夏の終焉を告げるのも、澄みきった秋の空を渡り鳥の群れが横ぎっていく

のも、魚が水に戯れるのも、それらすべてが多様な生の姿です。

また、身近な例をとれば、私たちがベートーベンの旋律に生の歓びを呼びおこされるのも、あかね色に染まった富士の秀麗な雄姿に心を洗われるのも、人間としての生命の発動の一つだと思う。森羅万象がおりなすあらゆる変化相が、そのまま生命の真実の姿であると考えられますね。

——宇宙の変転そのものが、広い意味では、底知れぬ不思議さを秘めた生命の活動体だと思われます。昔の人びとは、天座にかかる恒星は、永久に変化しないと考えていた。太陽と同じように、みずからの働きで輝いている恒星は、その名が示すとおり、不変の星だと考えられていたわけですが、四季をいろどるこれらの夜の星にも、生と死の運命が待ち受けていることを、いまでは天文学が証明しています。人間や他の生物と同じように、私たちの太陽も、五十億年ほどたてば、光りをなくし、死を迎えるときがくるといいます。このいまの瞬間にも、宇宙のどこかでは、新星がうぶ声をあげているし、また、他のところでは、強烈な閃光を残して消滅していく星もある。

このような、大は恒星から、小は流れ星にいたるまでの数々の星の運命をいだきつつ、現在の宇宙は、不思議なことに、巨大な速度で膨張ぼうちようをつづけているという。宇宙全体が、壮大な生と死のドラマを演じているようです。

池田 宇宙の営みは、空間的にいえば、小さいところでは、電子、中性子などの素粒子や、それによって構成される原子といったものから、ウイルスや細菌を経て、大きくは、恒星やわれわれの太陽系を含んだ銀河系宇宙、さらに果ての知れない大宇宙そのものにまでいたるといえる。また、時間の観点から考えると、素粒子そりゅうしのように、瞬時にして消えていくものから、星や星雲の寿命じゅみょうのように、百億年を越える寿命をもつものもある。こうした、さまざまにくりひろげられるすべての活動が、壮大な宇宙生命の神秘をかなでているといえるでしょう。

宇宙、物質、生命の謎は、どこまでも広く、また、目もくらむほど深い。過去と現代の哲人が、その深さにとまどい、多くの科学者が、嘆息をもらすのも、無理のないところだと思いますね。科学者たちは、森羅万象の種々の姿を、ある

者は物理化学の法則にあてはめて、また、他の研究者は、生理や心理の現象として探究の手を伸ばしていくであろうし、その努力はまことに尊い。

しかし、生命の探索たんさくにおいて、もっとも重要なことは、あるときは、物理現象や生態現象として、またあるときは、生理や心理の現象として顕現けんげんする生命の働きを、ただ直線的に追うだけでなく、まさに、それらの現象を現象として成立させている根源の实体と、その原理を知ることではないかと思う。

多彩な生命の種々相を生みだし、生命を生命として顕在化させている根源の實在は、いったい、どのようなものであるかを真に突き止めたとき、宇宙と物質と生命の謎は、一挙に氷解ひようかいしてしまわないだろうか。最初に話が出た、世界の三つの謎というのも、三つが、それぞれバラバラなのではなく、じつは共通の謎なのですね。

生命を探索する哲学と宗教の役割りは、あらゆる生の底流にいたり、生命を生命として顕現けんげんさせる各種の原理と、そこにある源泉をさぐりあて、それを、人びとの生活に反映させ、生の歓喜と創造をもたらすことです。

私たちの、生命についてのこの論議は、過去の偉大な知性を尊重し、その成果を生かしつつも、それにとどまらず、宇宙と生命の根源的な実在にまで、探究の思索をのびしていくのでなくてはならないと考えているが、どうだろうか。

——まったく同感です。このてい談の目的とその方向と特性が、明瞭になったような気がします。

「色法」の世界について

——ときどき「人間の生命はどこにあるのか」という質問をうけて、とまどってしまふことがあります。まったく素朴な疑問のようですが、それでいて明確に答えられる人は、ほとんどいないのではないかと思われれます。

——たしかにそうですね。心臓や脳が、どこにあるのかといえ、小学生ぐらいになると、だいたい知っています。ところが、自分の生命自体が、この身体はどこにあるのかと問われると、考え込まざるをえないですね。おそらく生命をめぐる謎のなかでも、もっとも単純な疑問でしょうが、また、もっとも身近で現実的な問題でもあります。

ノーベル賞をうけた生理学者の一人であるアレキシス・カレル博士は『人間

——この未知なるもの』という書のなかで「われわれ人間は人間を知らない。われわれの内部世界は茫漠たる末路の地である」と述べています。

その博士が「ニュートンやラバアジェーが、あれだけの努力を精神的方面や人間、人生の研究に払っていてくれていたら、われわれは、どれほど幸福になつていたかしのれないのに……」と嘆いたという話が伝えられていますが、たしかに、そのとおりですね。

池田 まったくそのとおりだね。人間は、自分のことなら、なんでも知っているような錯覚に陥りがちだが、じつは、自分自身についてこそ、もっともわかっていないというのが真相でしょうね。身体が、どのように微妙な調和をたもっているのかも知らないだろうし、欲望や感情が、どこから生じてくるのかも、究極的には突き止めてはいない。人間生命の全体像とその内容を解明しつくさなければ、先ほどの疑問にも答えられないでしょう。まして、臨終がしのびよっても、死後の生命についての明確な認識をもっている人は、ほとんどいないのではなからうか。

このような状態では、人間らしい生涯を送ることも、カレル博士がいうように、幸せな人生を切り開くことも、まことにおぼつかないと思う。自己の生命は、どこにあり、どのような実在であるかを思考することは、生命論の出発点であり、また、終着点にもなりうると思う。さらに、別の観点からいえば、みずからの生命を知することは、人間らしい一生を送るための必要不可欠な課題だね、しかも最低限の——。

——そこでまず、もっとも常識的なことから考えたいと思いますが、人間の生命といえども、その活動を営んでいる肉体は、他の生物や物体と同じように、物質で構成されているという事実があります。

(注1)

人間の肉体を細かく分析し、分解していくと、細胞からDNAやたんぱく質を経て、最後には、炭素や窒素などの元素にまでなってしまう。少なくとも、現代の科学が明らかにしているところによれば、それらの元素は、宇宙のどこにもである、宇宙に遍満している物質なんですね。どのように変わった人間でも、特別な元素でできているなどということはありえませんが(笑い)。

したがって、構成成分からいえば、たしかに、人間の身体といっても、この世界を構成している、あらゆる無生物や機械とまったく同じなのです。だからといって、人間の肉体が、時計などの機械と同じだとは、とうてい考えられません。その機能には、機械とまったく異なるものがあるからです。

——生命体の営む働きの神秘さ、複雑さが、まだよくわからなかったころは、肉体を機械と同等にみる考え方もあったようです。二百年ほどまえ、フランスに出現したラ・メトリーという学者です。彼は、有名なデカルトの流れをくむ学者ですが、動く機械と人間は、同じような存在だと考えました。一例をあげれば、心臓はポンプであり、歯はハサミであり、胃はツボであり、肺はフイゴである、といった調子ですね。デカルトは、人間には精神の特異性を認めていたので、これを別にし、「動物は機械である」といったのですが、ラ・メトリーは、精神といえども物質から派生してくるのだから、結局、人間も機械であると主張したのです。

ところが——ある本で読んだのですが——おもしろいことに「人間機械説」

が発表されたと同じころ、ロンドンでは「人間非機械説」が出版されたそうです。しかも、これを書いたのが、ほかならぬラ・メトリーらしいというので、当時は、そのうわさでもちきりだったそうです。人間を分解して、結局は、機械であると割り切ろうとしたところが、すぐそのあとから、人間生命は、たんなる機械ではない、という疑問が生じてきて、そのまったく反対の説を書かざるをえなかったのかもしれませんが。ともかく、この「人間機械説」は、十八世紀から十九世紀はじめごろまで、思想界の主流を占めていました。

それにしても、生命体と機械との相違点は、どのようなことに求めればよいのでしょうか。その相違点こそが、生命の特質をあらわしていると思うのです。

池田 そうだね。現在の機械は、デカルトの時代にくらべると、比較にならないほど精巧せいこうになっている。ほとんど、自然の生物とか、わからないほどの機能を示す機械もある。また、機械の精巧さは、将来、ますます増していくと思われる。しかし、どんなにうまくできた機械でも、天然の生命体とは、本質的に異なる点がいくつかあるように思う。

まず、機械には、その製作者がかならずいるものです。動かそうとすれば、エネルギーは外部から与えてやらなければなるまい。エネルギーの供給なしに永遠に動くような「永久機関」^(注2)などという便利な代物^{しろもの}は、この世に存在するはずもないし、自分の力でエネルギーを取りいれることもない。ところが、生命体は、みずからの力で、生を営むためのエネルギーを吸収しつつ、みごとな創造をなしとげていく。その知恵と力は、生命の内奥^{ないおく}に本来的にそなわっている。としか考えようがない。いいかえれば、生命体は、みずからが作者であり、また作品でもあると表現できるでしょう。

もう一点あげておけば、機械は、それが組み立てられてしまうまでは、いかなる機能も発揮できない。時計を半分組み立てたところで、正確な時を刻みだしたなどというSF的な現象はおこりそうもないからね（笑い）。だが、人間の身体はちがう。身体を構成するどの細胞をとってきても、みごとな生をかなでている。しかも、全体としては、細胞や臓器^{ぞうき}が相互に援助しあい、精妙なリズムを刻みながら、統一的な秩序をたもっている。個と全体の、調和のとれた生

の律動がそこにある。人間をはじめとするすべての生命体は、つねに、不完全であり、成長し、変化しつづけるものだが、しかも、どの一瞬をとってみても、一個の生命として完成しているといえるでしょう。

まあ、こういったところが、主要な相違点だと思うね。生命体を考えるときの重要な点は、それを機械の機能にあてはめるのではなく、ありのままの生命の営みを、素直に知見していくという姿勢を失わないことだね。

——人間の身体は、約六十兆個の細胞からできているといわれていますが、その一つ一つの細胞の働きでさえ、私たちの想像を絶しています。たとえば、肝臓の細胞は解毒作用、つまり、身体に入ってくる種々の有毒なものを分解するとか、新陳代謝しんちんたishayなど、現在わかっているだけで、二百種類もの働きをしているといえます。

余談になりますが、肝臓の解毒作用の強い人は、酒に強い、といわれるゆえんです。また、新陳代謝のほうからいきますと、肝臓が悪くなると、精神状態にも影響してきます。ちょうど、怪談にあるように、真夜中に、突然おきだし

てきて夢遊病者みたいになったり、人形かなんかをクギでうちつけて、のろつたりします。銅やアミノ酸の代謝がうまくいかないと、こういうことになります。

——これも耳にした話ですが、ある学者が、肝臓がつくっているだけの多種の化学物質を人工的につくろうとすると、そのための工場を建設するには、京浜工業地帯の何倍かの広さが必要だという計算になったそうです。

これが大腦になると、もっと大変です。私たちの脳は、重さからすれば、約千五百グラムぐらいの、ピンク色をしたかたまりにすぎませんが、そこに約二百億個もの脳細胞が集まって、さまざまな働きをしています。記憶、思考、判断、計算などといった各種の精神現象をおりなす肉体の「座」が、これらの脳細胞ですが、もし、大腦の働きに匹敵するほどの人工頭脳をつくろうとすれば、現在、判明しているだけで、地球の全表面をおおってしまうほど超巨大なものになるそうです。

——これは会長の『私の人生観』にも書かれています。私自身が、身体

の不思議さのなかで、新しい驚きを呼び起こされたのは、血管の長さです。毛細血管まで含めると、その全長は、九万六千キロにもなるという。ちよつと実感がわかないのですが、考えてみれば、地球を二周以上する長さなんですね。また、肺には、約三億の肺胞があり、酸素呼吸を行なっていますが、その肺胞の壁の全面積を合わせると、ゆつたりした部屋四つ分の広さになるといいます。まさに、脳にしても、血管にしても、その長さといい、大きさといい、また、働き自体が、地球的規模であると実感せざるをえません。しかも、一個の身体は、たんなる臓器や細胞の寄せ集めではない。身体は、細胞や組織や臓器の、おのおのの個性を生かし、特徴を十二分に發揮させながら、しかも、全体的統一と調和をたもって、創造的に生を営んでいる。その律動の姿は、かみわざ神技とさえ思えるほどです。

こうした神秘的ともいえる生命現象を説明しようとして唱えられたのが、先ほどの機械論に対する生せい気論です。生気論では、それぞれの生物には、その生命体に固有な力があると考えます。

池田 プノイマ、つまり生氣だね。

——ええ。そのプノイマが身体に宿って活動しているときには、生命は生きており、ずっとぬけていくと死がおとずれる、と主張しています。ずいぶん、神秘的な力を考えたものですが、ギリシャ時代からずっと生氣論として受けいられてきました。

まあ、そこに、機械論が台頭たいとうしてきて、一時は、人間や生物は機械と同じだといわれたのですが、どうも納得できない、となると、こんどは生氣論が、新しい科学のよそおいをつけて、よみがえってきました。それが、ハンス・ドリューシュの新生氣論です。彼は発生学の大家で、ウニの研究をしていてウニの“赤ちゃん”が生まれるところを観察していたのですね。そうしますと、やはり、生物には生物固有の原理を考えないわけにはいかない。

そうして、名づけられたのが、“エンテレキー”です。でも、生氣論者せいいきや新生氣論者のいうように、プノイマとかエンテレキーなどといった、超物質的、超空間的な“他者”を想定することは、ちよつと行きすぎだと思いますが——。

池田 細胞や臓器を統合し、その働きを調節しつつ、みごとな生を営む力やその原理としての法は、生命自体に内在するものであって、生命以外に、神とかプノイマなどを仮定するのは誤りだと思う。生氣という他者によって動かされているとすると、結局、身体も、たんなる機械であり、道具であるということになってしまう。ちようど、あやつり人形のようにね。生氣論は、機械説に反対しながら、超物質的な存在を仮定することによって「人間機械説」と同じ誤りに陥っているような気がしてならない。

このような悪循環あくじゆんかんを逃れるためには、身体そのものの特質を見ぬくことです。私は、人間の身体として顕現された生命の特質とは、そのうちに秘められた能動性であると考えたい。身体が統一調和をたもっているのも、外界へ積極的に働きかけて、自己の自律的な生を創造しゆくのも、生命の能動性のあらわれであると考えることが、生命の本源的な把握はあくのしかたではないだろうか。

——まさに、そのとおりだと思います。私が、いま医学を学んだ者として思い当たるのは、つぎのような二点です。一つは、身体には自己修復能力がそ

なわっているという事実です。自己修復能力というのは、かんたんにいえば、私たちの身体にそなわった自然の回復力というか、治療力ちりやうりきみたいなものです。トカゲなんかだと、シッポを切っても、またすぐはえてきますね。原始的な動物ほど、この力が強いのですが、人間でも、たとえば、先ほど話に出た肝臓などでは、三分の一ぐらい切りとっても、また再生してくるのです。肝臓の細胞自体のなかに再生能力があるのですね。また、私たちがケガをしたとき、新しい細胞群——肉芽にくがと呼んでいます——それが盛り上がってきて治っていくのも、外科手術が可能なのも、身体にそなわった修復能力のおかげですね。

二つめは、一般に免疫めんえきといわれる現象です。免疫をつかさどる血液のなかの多核白血球は、血流にのって生体を回っているのですが、細菌などが侵入してくると、まっしぐらに敵をめざして追いかけていって戦うのです。約一分後には、それをのみこんでしまう。また、抗体こうたいという特異な物質をさかんにつくります。細胞もあります。この物質は、おもに、たんぱく質でできているのですが、侵入者をつかまえて、その毒性を無効にしてしまうというおもしろい働きをし

ます。わかりやすく説明しますと、よく、カギとカギ穴とにたとえられます。これは、エールリッヒという免疫学者の考えだした理論です。一応の理解には参考になります。むろん、カギのほうが入り込んだ細菌や異物で、それをつかまえる抗体がカギ穴です。つまり、抗体がカギ穴みたいになって、そこに、侵入者をとらえてしまうのです。しかも免疫現象で興味深いことは、自分と他人を識別する能力をもっているという事実です。細菌などに対しては、抗体ができて、これと戦います。つまり、細菌なんかは、自分のものではないということとを、ちゃんと知ってるんですね。ところが、同じたんぱく質でできていても、自分の肉体を構成する細胞に対しては、抗体はできません。もし、自分のなかの赤血球に対する抗体ができたりすると、赤血球がこわされて全部とけてしまいますから、一瞬さえも生命をたもつことが不可能になります。何を敵として戦うかということとを、身体はもともと知っているんですね。身体のもつ偉大な知恵の一つだと思います。

——生命の能動性というのは、生をつくる力ばかりでなく、そのなかに

「身体の知恵」をも含んでいるんですね。ところで、生命の特質としての能動性が、まさに、その特質を発揮するためには、宇宙全体から物質を集め、身体として現象の世界に顕現しなければなりません。

身体とは、生命内在の能動的な特性が、その力を発現し、生を営む生命の座であり、現象世界での場であると考えられます。日蓮大聖人の『御義口伝』のなかで、「**帰命**」きみよちということについて論じたところに、「又**帰**とは我等が色法しきぼうなり命みよちとは我等が心法しんぼうなり色心不二なるを一極いちごくと云うなり」とあります。帰命とは、名のとおり、自己の生命を信仰の対象に帰入させる信仰の姿勢で、この一節の深い意味については、後ほど、もう一度とりあげたいと思いますが、とりあえず、ここにでてくる色法ということについて考えてみたいと思います。色法は、心法という言葉とともに仏教用語ですが、そのなかで、まず、色法というのは、生命内在の能動性が、生命を自己創造していく現象世界の座とか場とかをさしていると考えてよいのではないでしょうか。

池田 この世界は、たしかに物質で構成されている。私たちの身体も、物質

的存在であることにかわりはない。しかし、色法とは、「法」とある以上、たんに、物体とか、また物質とかをさしているのではないと思う。いままで、種の角度から考察してきたように、身体は、たんなる物質の集合体——寄せ集めではなく、全体的な秩序と調和のもとに生を営む統合体であり、みごとに生を自己創造する主体的な実在でもある。また、一個の細胞といえども、美しい調和のリズムをかなでる個性的な統一体であるといえるでしょう。

生命の能動性は、宇宙のかなでる妙なるリズムにのって、不可思議な種々の変化相として姿をあらわす。人間や動物とちがった非情の生命としての顕在もあれば、かわいらしい小鳥やチョウとして生を営むこともあるでしょう。そして、生命の能動性の精緻な発現は、人間の身体においてきわまるところで、私たちの肉体の働きは絶妙です。このような生の、まことに多彩にして妙なる能動性の顕現するダイナミックな現象の世界を、色法と考へてはどうだろうかと思うのです。

したがって、現象の世界を探究することによって、そこに能動性としての力

とともに、それをもたらす、内なる「法」を見いだすこともできると思う。無生の世界のなかから、科学者は、物理、化学の法則を見つけたでしているし、生物の世界からは、生理学的法則や生態学的な体系をも抽出できる。だが、これら各種の法則も、それぞれの生に内在する能動性としての生命の「法」の個別的な顕在化であると知ることが肝要です。法として、また力として、生命の能動性のおりなす世界——それが色法の世界であると思う。

——色法とは、けっして靜的なものではなく、生の内奥から脈動するダイナミズムとしてつかまなければ、その眞の姿を知ることとはできないのですね。

日蓮大聖人の『十如是事』の一節には、「初めに如是相によぜとは我が身の色形しきぎように顯あらわれたる相を云うなり」とあります。このなかの「如是相」というのは、一応、かんたんにいえば、「是かくの如き相」という意味で、私たち自身の生命にあらわれた種々の姿とか、形をさしていると考えられます。したがって、そのつぎに「色形に顯れたる相」とありますが、ここにいう「相」ですね。それは、肉体自体の活動はどうせんのこととして、精神活動の営まれる場としての肉体の

諸相をも、すべて含むわけですね。

池田　そうです。理性の働きとしての判断力、計算力、また良心の働きとしての善悪の識別力、それから、各種の欲望や感情などのような精神現象は、まさに、人間特有の色法をその座としてあらわれてくるといえる。したがって、逆に「色法」を通して「心法」を見ることもできるのです。しかし注意しなければならぬのは、脳細胞の働きを、どのように精密に分析していても、精神そのものの内容にまでは立ちいたることはできないでしょう。

たしかに、脳細胞なくして、いかなる精神現象もうかびあがってはこない。つまり、脳細胞は、生命の能動性が、精神活動として顕現される肉体の座であって、生命それ自体ではないからです。生命は、肉体を構成し、生を営むが、肉体のみが生命の全体像ではない。したがって、精神や心の内容を、真に知るためには、こうした生命の能動性をもたらす根源の实在を求めて、さらに深く、生命そのものの内奥に私たちの眼を向けなければならぬと思う。

——色法の世界にしても、その不思議な様相を語りつくすのは、至難のわ

ざですが、脳細胞の働きと、それに密接にかかわりあう精神の問題が出てきたところで、ひとまず、現象の世界を去って、生命の内奥の探究に入りたいと思います。

心の深層をさぐる

——私たちは、ともすれば、見すごしてしまいがちですが、日常、どこにでもある出来事であっても、もし、偉大な知性を向ければ、おもわぬ真実が発見されるものです。

これは、十九世紀の、いわゆる精神分析学をひらいたフロイトの話ですが、彼は「日常生活で、人間はまったく偶然としか思われぬ行動をすることがある。ふと物忘れをするとか、約束を忘れてしまふとか、書き損^{そと}いをするとかいったことに、原因はないのだろうか」という疑問をいだいたのだそうです。彼には、たんなる偶然^{ぐうぜん}とは思えなかったものでしょう。周知のように、自然科学では因果関係を追究します。地球が太陽の周り^{まわ}りを公転するのも、また、大空高く投げあ

げた石が落ちてくるのも、物理的な意味での因果関係にもとづいています。同じように、いままで偶然として片づけられてきた、これらの心の働きにも、かならず、心理的な原因があるはずだと考えたのです。たとえば、約束を忘れるのは、その本人は意識しなくても、心の底には「約束を破棄したい」という気持ちがあつて、その力が、約束の記憶をつつみこんでしまったからであるといふのです。また、書き損いをするのも、誤つたほうの字を書くような衝動的な傾向性が、生命自体に秘められていたからだと考えたのです。ずいぶん、ひねくれた考え方をする人だなと思うかもしれませんが、彼のこのような思索が、生命の深層を開いていったのですね。

——フロイトの思索が正しかったことは、後の歴史が証明するところです。が、彼にはじまる深層心理学者たちの最大の功績は、心の奥に、意識にのぼらない広大な部分を発見したことだと思います。彼らの説によれば、人間の心——生命といいかえてもよいのですが——は、まっ青な海にただよう流水にたとえられるといひます。

冰山というのは、海面上に出ている部分は、たとえ小さくても、その奥には、予想もできないほど巨大な部分が隠れているわけです。私たちの心のうちで、意識的な精神活動は、ちょうど氷山の頭のように、ごく小さい領域りょういきをしめているにすぎず、ほとんど大部分は、無意識の心として生命の奥深く隠されたままであると考えられます。

池田 深層心理学が、意識的精神活動は、氷山の水面上にあらわれた部分であり、その下には巨大な無意識の分野があり、しかも、その全体が生命という大海のなかをただよっているというのは、非常にわかりやすい譬たとえですね。この譬えをかりると、おそらく、深海には、私たちの想像もつかないような光景がくりひろげられているにちがいない。世にも奇怪な魚類が、わがもの顔に泳いでいるかもしれないし、サンゴのような樹林が広がっているかもしれない。同じように、生命の海には、意識活動をおこしたり、肉体の能動性をささえたりする、さまざまな力がうずまいていると考えられる。主要な要素をあげただけでも、食欲や性欲といった本能的衝動あり、不安や恐怖や喜びなどの感情、

情念あり、理性あり、良心あり、また、権力欲や所有欲などもあるのでしよう。自分では考えもしなかったようなグロテスクな衝動がうごめいていたり、意識にもものぼらぬような感情の嵐が吹きあれていたりするものだ。私たちが、意識するとならないとにかかわらず、これらのあらゆる力が、渾然一体となっているのが、私たちの生命の内奥の姿だね。これを仏法では心法というが、この心法の領域が色法へと顕現しつつ、生を創造へとかりたてているのが、生命の世界であると私は思う。

——日蓮大聖人の『十如是事』に「如是性とは我が心性を云うなり」とあります。「如是性」とは、文字どおり読めば、「是くの如き性」ということです。が、私たち自身の性質とか性格とかを意味すると一応は考えられます。しかし、その深い根拠をさぐっていくと、如是性、つまり、ここindeでてくる心性というのは、各種の心的内容が、融合しつつおりなす心法の世界の、統一的な全体像を意味しているように感じられますが——。

池田　そうだね。各個人は、その人に特有な心法の世界を形成しているもの

だ。生まれつき本能的欲求の強い人もいれば、激しい感情の嵐がたえず生の奥底をゆさぶっている人もいる。また、精神的欲望の一つである愛情のこまやかな心性をもった人間もいると思う。これらのさまざまな心性の独自性は、精神活動として肉体の動きのなかに、かならずにじみでてくるものだ。色法としての現象を、するどい洞察力どうさつりよくで詳細しょうさいに観察すれば、心の深層も、その人の心性も、手にとるようにわかるのではないだろうか。

——心の微妙な動きが、人間の行動や肉体をどれほど大きく左右するかを示す、顕著けんちやくな実例があります。大段智亮氏だいだんちりやうが書いた本のなかに、まことに興味深い話があります。それは、ある医者いしやの、ねばり強い、詳細な記録によって判明した事実です。

ある病院で、二人の人が、子供の看病をしていました。一人は、その子供の母親です。もう一人は、賃金をはらってやとった付き添いの看護婦さんでした。担当の医者が、この二人の血液の状態をしらべていたのですが、不思議なことふしぎなことに気がついたということです。というのは、当の子供の病気が軽いときには、二

人とも、血液の状態は正常なアルカリ性を示していたのですが、子供の病気が重くなって生死の境をさまようような状態になると、とたんに、母親の血液は強度の酸性にかたむいたのです。心のなかの不安や苦しみの感情が、肉体に反映したのだと思います。ところが、付き添いの看護婦さんの血液は、つねにほとんど正常であったということです。だからといって、その看護婦さんが、特別に薄情な人だったというわけではありません。また、子供が全快するのを願わなかったといえばウソになります。それでも、心の状態は、ありのままに、色法の世界に反映していくのですね。

池田 科学の眼がとらえた、みごとな実験例だね。心法と色法の密接な相互関係を、うきぼりにした一つの実証だと思う。

——子供の教育上、たいへん参考になると考えられる実例が、もう一つあります。メダルト・ボスという精神身体医学者のレポートですが、七歳になる、元気すぎて、やんちゃな男の子がいました。チョコレートが大好きでしたが、母親は子供の手がとどかない戸棚の引出しにしまいこんでおいたということです。

男の子は、幼い知恵を働かせて、足台や椅子をくみあわせ、命がけでチョコレートをとっていました。その行為をみつけた母親が、罰として、子供の手をしぼり、高い机のうえで、チョコレートがよくみえる場所にすわらせておいたのです。かわいそうに、その子は、大好物を目の前にしながら、とることもできず、机からおりることできない状態でした。

この罰則を数回くりかえしているうちに、子供の精神状態は非常に不安定になってきました。とともに、全身に、ハシカのような発疹はっしんがでてきたというのです。母親には、この病気の原因はつかめなかったのですが、欲しいものを食べたいという本能や、それにもなう興奮、不安、怒りなどの感情が、心身の両面に、異常な形で噴出ふんしゅつした結果であることは明らかです。医者の忠告で、この罰をやめると、症状もすっかりおさまったそうですが、心のなかの動きは、かくもみごとに色法の世界にあらわれるものだなと、あらためて実感したらしいです。

池田 いまの話をきいていると、幼い生命に心の傷を残さないためには、よ

ほどの配慮が必要であることがわかるね。その子供の心性をよくみきわめて、賢明な形で、欲望や感情をコントロールすることが肝要です。そのためにも、心の深層を、さらに深く知る必要があるのではないだろうか。生命の全貌ぜんぼうがわからなければ、どのようにコントロールしていけば、立派な人間性を養えるのかもわからないでしょう。

ところで、心の世界は、理性や良心や欲望などに限定されるものではない。その底流には、さらに一段も二段も深い生命の法が、実在しているのではないかと考えられる。そうでなければ、理性や良心や衝動、また、感情などの実在とその活動は、たんなる偶然になってしまう。また、これらを生みだした根源の実体は、永遠の闇にほうむられてしまうことにもなりかねない。

このあたりになると、人によって意見がわかれているね。たとえば、フロイトは本能的欲求がすべての源泉であるといい、ニーチェやアドラーは権力欲とか権力への意志にそれを求め、マルクーゼは生と死の衝動説をとなえている。また、これらはすべて、人間生命が誕生したときに、すでにそなわっていたも

のだともいう。たしかに、本能、衝動とか、権力への意志などは、理性や良心さえも動かす力をもっているでしょう。しかし、その本能的衝動などの噴出するもう一步奥の源泉は、個人の無意識の底辺をつきぬけた領域にあるような気がする。

——フロイトとならび称される深層心理学者の一人であるユングは、人間の生命の奥底は、人類共通の基盤を形成しているという説をたてています。ユングは、心理学から宗教への有力な橋をかけた学者でもあるといわれていますが、彼の主張するところは、一人の人間の心の底流には、人類発生以来のすべての遺産が流れこみ、他の三十七億の人びとと交流しあっている、というのです。彼は、このような人類全体にまで広がった心の深層を「集團心」^(注4)と命名しています。

池田 科学も発達すれば、ずいぶん、仏法に近づくものだね。「集團心」とは、うまく名づけている。だが、人類共通の生命の根源を、さらに数段ほりさげるべきだとも思う。人類の心は、あらゆる生物の生命の底流に通じていよう。

そして、すべての生ある存在の内奥には、草木とか、石とか、大地とかをも包みこんだ大宇宙自体が実在しているはずです。一人の人間の生命は、たんに自己の無意識層にとどまらず、人類共通の基盤、さらに、あらゆる生物の共通基盤をさえつきぬけて、宇宙自体に律動する生命の根源的実在へと通じ、そこから生を創造するエネルギーをくみだしているという事実を、仏法の英知は見ぬいていたと思う。

すべての生の最深部に、生命を生命たらしめている根源の力がある。いや、生物のみならず、死せる物体をも、その根底からささえつつ、力強い調和の律動をかなでる宇宙存在の力と法がある。それを、仏法では、「実相」といい「玄げん宗の極地しゅうごくち」、また「妙法」という。この宇宙の本源の実在のもつエネルギーが、あらゆる存在物に能動性をもたらし、生を創造しゆく発動力ともなるのです。

もし、この生命のエネルギーが、色法の世界に顕現すれば、物質界のさまざまな法則としての姿をあらわし、物質を統合し、調和させ、大宇宙のリズムとともに共鳴しつつ律動するにちがいない。つまり、これらの法則は、宇宙生命

内在の「妙法」という根源的な法の顕在化であり、個別化なのです。また、生命エネルギーが精神の領域を形づくれば、理性を生み、良心をめばえさせ、各種の衝動へと力を与えつつ、さまざまな心的現象をおりなすにちがいない。しかも、この色法と心法は、渾然一体となり、融合しつつ、生命の創造をくりひろげているのが、宇宙と生命の本質的な真の様相だと思う。

——日蓮大聖人の『御義口伝』には、「大地は色法なり虚空は心法なり色心不二と心得可きなり」と記されています。ここにいう虚空とは、一般にいう「空」ではありませんね。

池田 宇宙生命自体の心性だね。それを虚空といい、心法という。そうすると、大地というのは、私たちの目でみえる大宇宙だね。つまり、現象世界をおりなす宇宙だね。

——そうしますと、いまあげた文章の意味は、大宇宙自体が、色心不二としてのリズムをかなでいるととれますね。

池田 そう。大宇宙といえば、純粹に物質的存在のようにみられるが、その

色法のうえにあらわれる不可思議な種々相の能動性、心法というべきものがある。しかも、その能動性をささえ、生みだす根源の実体としての「妙法」に眼を開けば、色心の融和ゆうわした実相を知見できると思う。人間生命について考えれば、このような色心不二の實在としての宇宙生命自体が、個性化し、個別化した一つの實在こそが、各個人の生命といえよう。

——人の生命が、宇宙の生的発展の姿であると考え、その内奥が宇宙の根源に通じ、しかも、色心不二としての生をつくつていているという事実が、明瞭りょうに理解できます。ところで、宇宙と人の生命が、ともに色心不二の實在として、共鳴しつつ、生を営んでいる動的な様相は、先にあげた「帰とは我等が色法なり命とは我等が心法なり」という『御義口伝』の文もんに、適切な形で示されていると思うのですが——。

池田 この文は、宇宙と人間の本源的な関係を、まことにするどくとらえていると思う。生命体を形成する色法は、この大宇宙からその一切を集めてつくられるとともに、それは、やがて宇宙生命に帰っていく。一瞬もとどまること

なく新陳代謝を行なっている。これが「帰とは我等が色法なり」という意味だね。

これに対し、心法は、このたえまなく変転する物質をよりどころとしながら、それ自体としての、統一的な生の調和を少しも損ずることはない。その生命の奥には、生を創造する「生命の火」が赤々と燃えたぎっている。いいかえれば、物質の変転を推し進めるその力こそが、心法の奥深く、生の底流から流れこんだ宇宙生命そのものの本源力なのです。

——それが「命とは我等が心法なり」という意味ですね。

池田 すべての生命的存在の心法は、宇宙生命自体に命もつづいている。そして、宇宙と人間の生は、その生命の力を中核にして、融合ゆうごうし、立体的に律動していると考えられる。

——じつさいに、人間の身体を構成している物質は、つねに新しいということを立て証するデータがあります。たとえば、ナトリウム24という放射性物質を静脈に注射すると、五秒後には心臓や肺や血管にいきわたり、七十五秒後に

は汗となって排出されます。あとは歯や骨に入りますが、それも一か月ほどで全部体外に出てしまします。

また、肝臓を構成しているたんぱく質は、二週間ほどで半分が交代し、筋肉のたんぱく質は四か月で、すっかり代わってしまします。脳細胞といえども、例外ではありません。私たちの細胞の構成成分は、一年もたてば、ぜんぶ跡形もなく入れかわってしまうことが、放射性物質をもちいた各種の実験から明らかになっています。

池田 物質は、刻々と流動している。精神活動も、意識の表層に浮かんだと思うと、つぎの瞬間には生の内奥に帰っていく。このように色法と心法とが、たがいに融合し、渾然一体となって、生を営んでいるのが、色心不二の实在としての人間生命だと考えられる。色法と心法の二つの世界としてあらわれつつ、しかも融合し、統一された一個の生命体が、私たちの姿そのものなのです。人の生命を色心不二ととらえることによって、生命の全体像を、その根源から解明したことになると思う。

——そこで、先ほどの『御義口伝』の「帰とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり」というのは、実践論として考えれば、まさに、宇宙生命自体から生の発動力をえて顕在化し、個別化した人間生命が、こんどは、生命本源のエネルギーを積極的にくみとる作業をすべきである、との教えとも思われます。

池田 ここにいう「一極」とは、宇宙生命であり、「妙法」といえる。それに「命もとづく」ことが、人間として最大の力と幸福をえる根本的な道であり、また、人間としての本来の行動だと考えてよい。人びとのなかには、この本源的なエネルギーの、生命内奥への流入が、あまりにも弱かったり、阻害されて苦しんでいる不幸な人が多すぎる。それを根源から変革するのが、仏法の実践の意義である、と私はいいたい。

自然のなかの人間

Only One Cosmos

—— かけがえのない宇宙 ——

—— 大自然の神秘をひめた優雅な美を、直観的にうたいあげた詩に、ウォルト・ホイットマンの「奇蹟」があります。少し長いと思いますが、前半だけ読みあげてみます。

おや、誰がこの大した奇蹟きせきを作ったのか。

私に関する限り、なんでも奇蹟なのだ。

私がマンハッタンの街を歩くのも、（中略）

森の樹蔭こかげに佇たたずむのも、

昼間に愛する誰かと話するのも、夜、愛する誰かと寢床ねどこに眠るのも、

他の人々と晚餐ばんさんの食卓につくのも、

馬車の中で向う側に乗ってる見知らぬ人々を眺めるのも、

夏の午前の蜜蜂みつばちを見守るのも、

野原に放牧せる動物も、

鳥も、空中の昆虫の不思議も、

日没の不思議も、静かに瞬またたく星辰せいしんも、

春の新月の類たぐいなく優美な細い曲線も、

これ等はその他と共に、一つ残らず私には奇蹟である。

凡すべては関連し、しかも各自ははつきりと其の位置にある。

ホイットマンばかりではなく、新大陸の黎明期れいめいを飾った多くの文学者、たと

えばエマソン、マーク・トウェイン、ソロー、メルヴィルなどの作品を読むと、

いたるところに、ダイナミックな調和をかなでる大自然の「奇蹟」が顔をのぞ

かせていますが、私はホイットマンの詩がもっとも好きです。ところで、この

詩にもあるようにホイットマンの生命には、人間をはじめとする万物の姿が、

ありのままに生き生きと映し出されていたのでしょね。そして、すべての存在が集まって、一つの大きな統一体をつくっているように彼は感じた……。

池田　みがきぬかれた詩人の魂に、人間生命や動物や星や月のおりなす秩序ある旋律が響きわたっていたのだと思う。そして、彼の偉大なところは、人間と鳥と昆虫と、星と月と太陽との間にも、目には見えないにしても、やはり絶妙なつながりがあることを見ぬいていた点でしょう。たしかに、いかなる生命的存在も、孤立して、ひとりで生を営んでいるものはいない。たとえ表面的には、なんの関係もないように考えられる生き物や自然の間にも、一步深く追究すれば、きわめて精緻な結びつきがあるのだろね。

宇宙万物の間に張りめぐらされた、この精緻にして微細な結びつきは、“生命の糸”と表現できるのではないか。

——“生命の糸”という表現はいいですね。私たちと万物との関連が現実味をおびて感じられます。

池田　うむ。だがこの“生命の糸”がはらんでいる深い意味を正確に理解し

ようとすれば、詩的直観も重要だし、また、欠かせないものだが、しかし、そこに科学の知による裏付けも必要だろうね。科学の論理的な知恵に裏付けられてこそ、直観の光彩も、ひととき鮮かな輝きあざやをみせるにちがいないからね。

—— 私たちは、土のなかの細菌や、食べ物にもならない海中の生物などは、ほとんど無関心ですが、これらの生き物と人間生命は、やはり、密接な関係があるのですね。こんにち、世界に巻き起こっている公害反対運動のささえとなる学問に生態学がありますが、この学問が見いだした自然界の法則の一つに、つぎのような原理があります。「すべての生物は、他のすべての生物と結びついている」という原則です。あたりまえのことのようにも思えるのですが、これは科学者が苦心のすえにたどりついた、生物集団における「生命の糸」の発見といえますね。

たとえば、私たちの周囲にある森や林のなかでは、多くの生物が生息せいそくしています。木々のこずえでは、小鳥がさえずっていますし、かれんな花をつけた草の間からは、すすやかな虫の音が響いている。土壌中には数えきれないほどの

昆虫や微生物がうごめいています。そのなかには、農作物に害をおよぼす昆虫もいれば、逆に人間に味方する天敵てんてきもいます。また、ゴキブリなどという、あまりかわりたくない仲間も生息しています（笑い）。

生物学者の計算によると、私たちが森に一步足を踏み入れると、その足の下には、ざっと数えて四万匹の微生物が生を営んでいるということです。「一踏み四万匹」と表現していますが――。しかも、これら無数の生き物は、複雑な“生命の糸”に結ばれて、たがいに助けあって生きているわけです。かんたんにいいますと、草木の光合成はよく知られた働きですが、その草木を食べて各種の昆虫が生をたもっている。その昆虫類を、鳥や獣けものがつかまえる。こんどは、それらの動物の死骸しかいを分解して、草木の栄養分として利用できるようにする役割りは、土中の微生物が担になっている。そして、バクテリア、つまり、各種の細菌が分解した栄養分と、動物の呼吸作用によってはきだされた炭酸ガスをもとにして、草木が生長し、酸素を供給するというわけです。ちゃんと一つの“輪”になっているのですね。だから、草木と微生物と動物の三者が協力しあって、

はじめて、すべての生き物が生存できるというわけです。人間も動物の一員として参加していることはいうまでもありません。

——海のなかでの「食物連鎖しよくもつれんさ」も、ほぼ似かよったシステムにもとづいて

います。食物連鎖というのは、おたがいに食物となる、また栄養分となる、といったような関係によつて連つらなつていることをあらわしています。森のなかなどですと、いま話の出た、植物と動物と微生物の関係で、これらは、たがいに相あひ克こくしあっているのですが、よく考えると、相克することが共存になっているのですね。相克を、もしやめるとすると、共倒れです。みんな亡びてしまう。

海のなかでは、プランクトンと大小の魚のつくりだす「輪」が食物連鎖になっている。光りを吸収し、有機物をつくりだすのは、植物プランクトンです。それを動物プランクトンが摂取せつしゆする。そして、動物プランクトンは小魚などの小動物のエサになります。大型の魚は小さい魚を食べて生きているのですが、その死骸はバクテリアに分解されて、植物プランクトンに摂取されるのです。海に石油を流して、これらの生物が死んでしまえば「輪」が破壊されて、人間

にとつての「海の幸」もなくなってしまいます。

——石油も、この連鎖を破壊する重大な敵ですが、食物連鎖にのっかって人間生命におそいかかるというか、傷つけるものがありますね。たとえば各種の有毒物質です。PCBとか、BHCとか、有機水銀ですね。水俣病の場合は、メチル水銀ですけど、たとえば、これらの有毒物質を河とか海に流しますね。すると、大量の水でうすめられるから、少々濃い原液を流しても大丈夫だろうと思うかもしれませんが、ほんとうはまったく逆なんです。

池田 食物連鎖によつて、かえつて濃縮のうしゆくされるのだね。

——ええ。水のなかですと、まず、植物プランクトンですが、そこから、何段階も経て大きな魚になりますと、最初の一万倍から十万倍にもなります。

——濃縮された有毒物質をたっぷり含んだ魚を、人間がいただくというわけです。大きい魚ほどおいしいことはおもしろいでしょうが、事実を知ると、あまりいい気持ちはしないですね。

池田 自然は生きているというが、みごとに関連をたもつて流動する大自然

そのものが、個々の生物体に劣らず驚くべき存在だね。まるで、一つの統一された意志と、全身にいきわたった神経系統をそなえた巨大な有機体の働きのようにさえ思われてくる。大自然のふところにいだかれて、無数の生き物が、助けあい、影響しあい、また、ときにはいがみあう姿を示すこともあるわけだが、全体としての調和と秩序は厳然として維持されているのだね。

まあ、人間の行為が、この秩序を破壊したり、傷つけたりしなければの話だがね。ともあれ、自然界のこの姿は、私たちの身体が個々の細胞の生と死を含みつつも、統一された全体的な調和をかもしだしている働きにもたとえられるでしょう。

——分子生物学者・渡辺格博士はある雑誌に「宇宙に潜む生命誕生の神秘」という論文を発表しているのですが、そのなかで「地球全体を一つの超生物であると考え見る見方もなりたつ。というより、近い将来、そういう視点が、ぜひとも必要になってくるような気がする」といっています——。

池田 まったくそのとおりだと思う。大地をはぐくみ、海洋には「生命の水」

を満々とたたえ、大気の成分は生物集団の呼吸をささえて、地球という惑星は、自転し、公転しつづけている。もちろん、ときには、台風やハリケーンが荒れ狂い、生物集団におそいかかることもあるでしょう。大地が怒り、震動し、火山がまっ赤な溶岩を流すときもある。また、周期的に、地球全体の環境が激変することもある。

たとえば、地球における氷河期は、約百万年前から、一万年前の洪積世の終わりまでつづき、海も河も大地も凍りついたといえますね。さらに、少なくとも、過去三十二万年の間に地球の磁場が五回も逆転したと報告されている。ただし、琵琶湖の地層を調べていてわかったことだったね。わかりやすいいえば、北極が南極になり、南極が北極にと入れかわるという大変動が起きたわけだ。だが、そのように波瀾万丈のドラマをおりこみつつも、三十億年におよぶ生物変遷の歴史を生みだした地球は、その中心部に四千度の燃えさかる火をかかえて、ほとんど無限と思われる宇宙空間をさすらっている……。地球自体が超生物であり、生命的存在であるとの視点が求められる時代に入ったのかもしれ

ないね。また、渡辺博士がのべられたように、近い将来には、すべての人びとの地球観も変わるだろうね。

—— たしかにそう思います。このような地球を守るために、一九七二年六月には、ストックホルムで「人間環境会議」が開かれましたが、そのとき、世界各国から多くの生態学者や医学者が参加し、貴重な意見を交換しています。

会議は「人間環境宣言」(注6)を採択^{さいたく}して幕を閉じましたが、そこに一貫して流れる

精神は、スローガンに掲げられた「Only One Earth(かけがえのない地球)」を守ろうとする人びとの願いであり、情熱でした。この「かけがえのない地球」というスローガンにこめられた内容も、地球を一個の生命体であると理解することによって、ひしひしと実感できるのではないかと思います。

池田　ただ、それが一部の動きだけではなく、すべての人が地球を生命的存在であると、感じるようになってほしいものだね。「Only One」——「ただ一つしかない」ということは、広い宇宙をみれば、他にも生物の存在する世界があるのかもしれないが、少なくとも、私たちや子供とか孫などにとっては、地

球はただ一つしかない世界であり、絶対に他にかけがえのない世界だからね。

それと同時に、もう一步視野を広げると、地球上にエネルギーを与え、万物の生をささえている太陽も、一個の生命的存在であると考えられるでしょう。

また、太陽と同じような恒星も、それが生死流転の旋律をかなで、宇宙を旅する巨大な生命であり、活動体であることに変わりはない。そして、銀河系宇宙だけでも、約千億個を数える恒星群の間には、精密な「見えざる糸」が張りめぐらされている。ニュートンの発見した万有引力の法則なども、星と星とをつなぐ、隠れた糸の一つだね。

このように考えてみると、生物集団をめぐる生態学的な連鎖も、地球をつくりあげている大自然のさまざまな働きの間に関連も、星と星、星団と星団をつないでいる物理的な法則も、そのすべてが複雑にからみあい、総合され、統一されて、大宇宙のあまりにもみごとなハーモニーをおりなしていることになる。人間、生物集団、地球、恒星、星団へと階層をなして広がっていく大宇宙の様相を、私たちの身体との対比で、わかりやすく説明すれば、つぎのようになる。

のではないだろうか……。

私たちの身体は、まず六十兆にもおよぶ細胞でつくられている。その細胞が集まって臓器や器官となり、また筋肉などの組織となる。しかも、すべての細胞の間には神経が張りめぐらされ、血液や体液がいきわたっている。人間生命や個々の生物を一個の細胞とみれば、生物集団は細胞群に対比されるでしょう。地球と太陽系などの系統は、心臓、肝臓、腎臓などの臓器、目や耳や歯などの器官等に対比されるね。

——そうすると、恒星群ぐらいになると、さしずめ、筋肉群や骨髄系などの組織系ということになる……。

池田　そういうわけです。そして、これらの各生命的存在にかかる「生命の糸」は、生命の秩序と調和をささえる神経系統の働きや、ホルモンなどの化学物質を全身に運ぶ体液や血液の流れと考えられる。したがって、もし、脳卒中で血管が破れたり、心臓病による血栓けっせんが血流をとめたり、神経が動かなくなったりすれば、半身がきかなくなったり、手足が麻痺まひしたりするように、大宇宙

に張りめぐらされた一本の繊細な糸でも、ぶつとりと切斷されれば、その影響力は宇宙のすみずみにまで広がっていくと考えざるをえないわけだね。

宇宙を住所とする一個の細胞としての人間生命のみが、たとえ間接的であろうと、微小であろうと、その影響を逃れられるはずもないでしょう。そこで一つ提案したいのだが、私たちの生命論の現実的なスローガンの一つとして、先ほどの人間環境会議のスローガンを、もう少し広げて「Only One Cosmos（かけがえのない宇宙）」を掲げてはどうだろうか。

——私たちの生命論にふさわしい、雄大にしてしかも根源的なスローガンだと思います。現代の地球人が到達した発想の基盤——「かけがえのない地球」——をふまえつつも、それをさえ、はるかにこえた実践目標ですね。たしかに、宇宙の律動を無視しての人類の幸福と安泰は、所詮、はかない砂上の楼閣にすぎないと思われます。

池田 人間生命のみならず、あらゆる生き物の生の尊厳を守るためにも、地球や太陽系の秩序ある営みを、けっして傷つけてはなるまい。それが、どんな

に小さいことであつても――。宇宙生命の内部に生を受けたすべての生命的存在は「運命共同体」を形成しているといえるでしょう。

――宇宙と人間生命との対比の話がでしたが、ここで、ちよつと思いつくのは、身体を食いあらず癌がんの存在ですね。癌の行動というか、生き方は、宇宙における私たちの行動に、きわめて重要な示唆しさを与えているように思われます。人間の身体のなかで、癌という細胞はきわめて利己的で、他の細胞を押しつけ、殺しつつ、異常なスピードで増えていきます。私たちのとつた栄養分をひとりじめにして、毒素を出しつつ、臓器や組織をも食いあらししていくわけです。私たちがいくら栄養のある食物をとつても、そのほとんどが癌細胞にとりこまれるのですね。しかも、癌の行きつくところは、人間生命を滅ぼし、その結果、みずからも死んでしまうという悲しい結末です。癌が「狂った細胞」と呼ばれるゆえんですが……。私、つくづく感じるのですが、人間は宇宙という生命体における癌のような存在になつてはいけませんね。

池田　ところが、現実には癌のように利己的な人間も多いから困る（笑い）。

しかし、地球上のすべての生き物にとって、宇宙の変転は、かけがえのない生の基盤だと思う。“狂った細胞”に人間自身が変質しないための、あらゆる努力が必要だね。

環境と適応

——宇宙という生命体には、数えきれないほどの見えざる糸が張りめぐらされていることは、先ほどから話題にのぼっていますが、私たちの周囲には、予想さえもしないような糸がからみついています。たとえば、地球上の生き物には、地球の重力が働いている事実は、いまでは、すべての人の常識です。だが、イギリスの宇宙物理学者、デニス・シイアマの理論というのは、まことに奇抜きばつですが、真実でもあります。

彼はつぎのように主張しております。「もし君が、一個のボールを空高く投げようとする、君の手にボールの抵抗を感じるだろう。それは、なぜかといえば、宇宙の全部の星が君にボールを投げさせまいとして、重力的な作用をお

よぼしているからだ」というのですね。ちよっとひねくれた考えのように思えますが（笑い）、この科学者はまったく真剣なのです。たしかに、ボール自体に奇怪なしかけがあるわけではありません。しかし、ボールには地球の重力とともに、宇宙全部の星の総合的な重力が作用しています。その重力に逆^{さか}らうから、手に抵抗を感じるのだという考えです。

池田 宇宙の果てからの使者だね。百億光年を越える星であっても、その重力が地球上の生命活動に影響をおよぼしているというのは、むしろ詩的だといええるね。

—— ええ。それに太陽となれば、さらに直接的な影響を、私たちに与えています。もし、現在の太陽の表面温度が、ほんの少しだけ上昇したとしても、世の中の秩序は、まったくひっくり返ってしまいます。

太陽の輝きが増すのだから、世の中が明るくなって助かるなどというのは冗談で、太陽が明るく熱くなると、紫外線も非常に強くなりますから、ちょうど年中、雪のなかでスキーをしているようなもので、皮膚がまっ黒になり、やが

て、眼も小さくなっていくにちがいありません。

——そうしますと、美人の評価基準もかわってきますね。色が黒くって、眼の小さい女性が美人ということになり、色の白いのは、見向きもされない、なんてことになりかねません。そうなったほうが、助かるんだがなあ、という女性もいるかもしれませんね（笑い）。もう少しすすむと、陸の上では暑すぎて、みんな水のなかへ入ってしまう。そして、ずっとそんな状態がつづくと、人間の知能よりも、イルカのほうが優秀になって、人間がイルカに飼育されるようになる……。まったくの空想みたいですけど、理論的にすすめていくと、こういうことになりますね。

——大洪水も起きますね。そして、強い太陽光線に耐えられなくなり、人間の生存自体にもかかわってきます。

池田 なるほど。人間の生命活動が、太陽という生命体に密接に結びついていて、という実例だね。太陽や天体のほんの少しの変動でも、地上の生活に大きな影響をおよぼすものです。

——最近、多くの学者から聞くのですが、激動する一九七〇年代に入って、牧口初代会長の著作が急激に脚光きやうくわうを浴び、人類の未来を憂える研究者の必読書になろうとしているといえます。とくに、そのなかでも『人生地理学』では、環境のもつ人間精神への影響力についての深い洞察どうさつが加えられているわけですが、それが注目されています。この書のなかで「環境と精神的人生」の相互関係のべた部分を少し引用してみます。

牧口会長の考察は、大自然と社会のすべてにまでおよんでいます。代表として、山、植物、社会に関するとところだけを取りあげてみますと、まず山についてですが、「いわんや、山は人情を和やわらげ、人心を啓発するの天師たるをや。かならずや山によりて愛護あいごせらるるの国民は、山を見ること、あたかも子の親におけるごとくならん。誰か山を愛せざるものあらんや。これにいたりて、これまで自己と相對峙あひたいじし、自己と異なりたるものとせる山は、今や自己と同じく世界の一部員となり、自己と相関の交際あるものとなり、ここにまったく有情物と化す」とあります。

植物については「要するに植物は吾人の美情を興奮し、吾人の殺気を緩和し、吾人の詩趣ししゆを発酵はっこうし、もって吾人の心情を涵養かんようするものなり」と記されています。

社会の心意作用に関しては「人が社会の制裁せいざいを恐れ、社会の褒賞ほうしょうを悦よろこぶことは、これすなわち社会に心意生活のありて作用することを承認するものなり。(中略)すなわち社会も個人と等しく智・情・意の心意作用の有ることを見るべし」とのべ、その基盤を各個人の精神にあるとして、「各個人の脳髄は社会なる一つの大きな有機体の脳髄を組成せる個々の細胞にして、それらの細胞の運動が、たがいに相伝播あいでんぱし、連絡し、ついに社会の全員におよぼし、もって大きな社会精神なるものを生ずるなり」と結論づけています。

池田 人間の精神と自然界や社会的、文化的な環境との相互作用が、みごとににつづられているね。この文章の真髓の意味については、後ほど、もう一度考えてみたいが、ここではただ、環境自体にそなわった「生命の糸」には、物質的なものばかりではなく、精神的、心情的な要素も含まれている事実盲目で

あつてはならない、という点を強調しておきたい。

環境のもつ精神的な影響力に着目しなければ、たとえ肉体的な破壊は免れても、そのまえに、人の心は精神公害の毒素によって狂乱の巷におとしいれられるにちがいない。

——それから、やはり、環境と人間のかかわりあいを深く考えるときには、日蓮大聖人の『瑞相御書』の有名な一節にある「夫十方は依報なり・衆生は正報なり」譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもって此れをつくる」との文を思索する必要があると思います。

この場合、十方というのは、四方八方という表現がありますが、それに上と下との二方を加えたものですから、全空間とか、環境のすべてをさしますね。そして、依報という言葉も仏教用語ですが、ここでは、すべての環境をさしていることを考えなければなりません。正報とは、環境とか依報に対する言葉ですから、生命の主体といえます。仏法では、これを衆生ともいっています

が……。そこで正報を人間生命とすれば、私たちをとりまく一切の環境は、依報としてとらえることができるでしょう。

この正報と依報の関係を、日蓮大聖人は「譬たとへば依報は影のごとし正報は体のごとし」と明確に定義されています。つまり依報は影のごとく、生命主体である正報によって動かされ、変革されていく存在であるとの意だと思えます。

こんどは逆に、生命主体としての正報は、それを取りまく環境によってさえられ、つくられていくものであるとの観点も必要であると説かれています。つまり「又正報をば依報をもって此れをつくる」の部分です。この二つの観点を、ともに考慮しつつ、総合していくときにはじめて、生命と環境との関連を完全に見きわめることができるかと推測されますが……。

池田 そう。具体的にいうと、宇宙のすべての星のもたらす総合的な重力、太陽から発するエネルギーの流れ、大自然に網の目のように張りめぐらされた生態学的な糸、また牧口会長の洞察力によって、みごとにうかびあがった大自然と社会の人間精神に与える影響などが、一体となり、調和され、統一されて、

人間という生命主体をはぐくみ、つくりあげている。この事実を「又正報をば依報をもつて此れをつくる」との文は簡明に表現していると考えられる。

だが『瑞相御書』に説かれた文の、より重要な論点は「譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし」の部分にあるといえるでしょう。正報を体にとえられ、依報をその影とされた深い内容を、生命論の立ち場から思考してみると、こうなるのではないだろうか。

人間生命はたしかに万物の営みによってささえられている。肉体がたもてるのも、精神がその活動をおりなせるのも、宇宙森羅万象しんらばんしやうの助けを借りていると考えてよいでしょう。

しかし、いかに強力な宇宙全体のささえがあつたとしても、宇宙からの働きかけに対応し、万物のささえを自分のなかへとりこんで、みずからの血となし、肉と化していく生命主体の能動的な力がなければ、私たちの生命は、一瞬たりとも、維持し活動できるものではない。

卑近ひきんな例をあげれば、どのように栄養たつぷりの料理でも、消化能力が弱け

れば、それを吸収し、身体をつくる材料にすることはできない。また、いかに貴重な書物でも、その内容を吸収するだけの知的能力がなければ、ただの紙とインクにすぎないと考えられる。

———そのところが誤って理解されている面が、多分にあります。たとえば、私たちは、ふつうに考えますと、消化管のなか、つまり、胃や腸は身体の内部分だと理解しがちです。ところが、医学的にいうと、消化管のなかは、立派な外界に属するのですね。だから、種々の食物を口から入れて栄養がついたように思っても、消化・吸収力がなければ、少しも身体の内部分にとりいれられないのです。たつぷりと栄養をとりいれたから生命力がついた、と錯覚してしまう人も多いようですが、細長い環境を素通りするだけなのです（笑い）。もっとも、食物の消化・吸収力は、一般的に言えば、男性より女性のほうが強いのが、ふつうであるとされていますが……（笑い）。

ところで、私たちの生命にそなわっている能動的な力を環境との関係からとらえて、医学では、てきおう適応能力と呼んでいます。先ほどの消化・吸収力のほかに、

空気中の酸素と結合し、炭酸ガスをはきだす呼吸作用や免疫の働き、四季の變化に対応する力などがあげられます。夏の暑いときなどは、汗腺かんせんがさかに働いて、皮膚の温度を調節しますし、冬になると、こんどは毛細血管が収縮したりして、保温につとめます。夏に、犬が大きな息づかいをしているのをよく見かけますが、あれは、体温を調節しているのですね。人間のように汗腺が発達していませんから、カッコ悪いといっても、まったく生理的な働きです(笑い)。私たちは、汗腺がよく発達していてよかったと思います(笑い)。それと、外界に対する認識能力も重要ですね。目とか耳とかの働きですね。

——重力に対応する物理的な力もあります。もし、物理的な抵抗力がなければ、私たちの身体は、重力に押しつぶされて、ひしゃげたカエルのような(笑い)あわれな姿になってしまいうでしょう。さらに、人間生命において、重要な位置をしめるのは、精神的な適応力ですね。社会への適応力や文化の摂取力せつしゆ、学問や知識の理解力などが含まれると思います。

池田 話が根本的なところに入ってきたね。生というものにひそむ能動性、

あるいは活動力を分析していけば、そこにも、じつに多彩^{たさい}な姿が見いだせるでしようね。生の内奥からの多種多様な発動力が顕現し、生命主体の具体的な活動がおりなされ、創造的な生が営まれる。したがって、生命活動の主因といえるものは、あくまで、環境条件を取り入れ、生の方向へと生かしていく発動力と、外界への対応性としての能動性が担っている、と考えることができると思う。

いかなる環境に對峙^{たいじ}し、栄養分と化していくかという選択権をもっているのは、能動的な生命であり、その主体の働きに応じて、外的環境のもつ意味も、微妙に変化していかざるをえないでしょう。いいかえれば、生命主体の発動力、能動性こそが、生命顕在化の原動力であるとともに、依報としての環境の变革・創造者でもあると考えたい。

—— 私たちのもつ認識能力についてですが、西洋哲学の最高峰の一人ともいえるカントの洞察には鋭いものがありますね。彼は、人間生命には生まれながらにして外界を認識する力がそなわっている、と主張しています。机がある

とか、母親がいるとか、星がきらめいているとか、また、飛行機の動き、生物の動きなどを、ずっととらえる力が、私たちにはもともとそなわっている。先天的な心の能力といっていますが……。

池田 さすがだね。西洋近代では、生命のなかにそなわった能力を見いだしたのは、カントがはじめてだと思う。単純化していえば、西洋近代をかざった哲学の流れを分けると、一つは合理論的方向になるし、他は経験論的方向だね。

——前者の代表が、デカルト、スピノザ、ライプニッツなどで、後者に属する哲学者が、イギリス経験論学派のホブズ、ロック、バークリ、ヒュームなどですね。

池田 そこで、外界の認識に関する考え方だが、合理論では、思惟しゆいとか理性が中心になって、外界をみとめるとしているね。いっぽう経験論では、ロックが、人間の心は白紙みたいなもので、そこに経験がしみこんでいくという説だね。どちらも、その一面では、真理をついていると思うが、しかし、外の世界を認識するという人間自身に内在する生命の働きに着目し、これを分析し、論

理だてたのは、やはりカントにおいて、ほかにはないと思う。

少しむずかしくなるが、ひとまず、カントの理論を聞いておくとね、私たちが外の世界を認識するのは、まず、私たちの感性かんせいという心こころの能力によって、外界を直観的にとらえる。カントは、時間と空間のワクを通じて、人は外界を知るなどと表現しているがね。たとえば、私のまえにコップが一つ置いてある。その形を空間的にパツととらえる。同時に、少しまえにもここにあった、という時間的なとらえ方もする。

また、もう一例あげると、窓の外に雪が降っている。その雪の形や大きさがそのまま入ってくる。そして一瞬まえには見えなかったのが、いまは窓の中間ぐらいいきている。つぎの瞬間には、大地にとどくな、などと考える。まあ、考かんがえるというところまでくれば、理性とか思惟の働きになり、それをカントは悟性ごせいといっているが、私たちの生命が、外の物を直観的にとらえる働きは、カントによると、先験的せんけんてき感性かんせいの機能と表現できよう。

さて、認識論においては、生命主体に内在する能力、つまり、カントの言葉

にしたがえば、先験的感性を正報とすれば、その対象は依報になる。正報にそなわった先天的な心の能力に応じて、依報としての対象の姿は、多彩に変化していくと考えられる。たとえば、人間の見る世界の姿と、アメーバや昆虫や他の動物の感じている環境はまったく異なったものだろうね。

——はあ。生物が、対象を認識するのは、目や耳などの感覚器官を通してですが、視覚によってうかびあがる世界、つまり、目で見る世界だけを考えると、多種多様ですね。アメーバやミミズは、明るさだけしか感じません。うすぼんやりとした、一昔前の写真のようなものです。昆虫の複眼ふくがんは、人間の眼のように正確な像は結べませんが、動くものをすばやくキャッチします。たとえば、スズメバチは、壁にとまっているハエとクギの頭を区別できないといわれます。だが、同じ昆虫であるトンボは、目の前を横切っていく餌えをすばやくとらえることができます。

人間ですと、あまり早い動きはとらえられませんが、昆虫は、ちゃんとその動きを追っていきます。また、夜行性の動物、たとえば猫は、瞳孔どうこうが闇のなか

では大きく開き、光りをあてると、細く閉じてしまいます。ほんのかすかな光りでも、感じとることが出来るからです。人間も、夜行性の生活を長くつづけていると、闇のなかの少しの光りでも見えるように変わっていくのでしょうね（笑い）。ですが、一般には、人間という生物には共通の感覚器官と対象を認識する心の能力が、先天的にそなわっていますから、人間同士は同じような世界を見いだすといえましょう。

池田 一般的に、ものを認識する能力については、人間は生物学的に共通の特質をもっていると考えてよい。また、身体にそなわった各種の適応能力や、社会、文化をつくりあげていく力も、ほぼ共通しているといえるでしょう。

このうち、人間精神に特有と思われる社会、文化を創造する力については、先ほどの『人生地理学』によっても、明らかです。社会の心意作用の個所で、一個の有機体としての社会精神は、それを構成する各個人の精神が基盤となり、たがいに伝えられることによって生じるものである、という意味のことが記されていたね。社会精神という個々の人間にとっての環境は、人間生命の能動的

な働きを基盤として創造されるものです。もし、人間に、社会を形成する能力がなければ、社会精神なるものは生じるはずもないでしょう。

だが、人間生命にひそむ能動性、発動力には、さらに人間や自然への愛もあれば、生命と宇宙の謎に挑戦する止^やみがたい衝動^{しょうどう}もあるでしょう。また、芸術や科学的真理への心も見いだされるのではないのでしょうか。愛、芸術心、宗教心、真理探究の心などは、まさしく人間らしい発動のエネルギーであり、このような力の顕現によって、その人の住む環境も一変されるのではないかと思う。

また『人生地理学』の山の個所には、山が人間にとって、一つの生き物のような意味をもつてくる事実がのべられている。人間の愛によって、冷たい無生物としての山も、その本質を一変し、暖かい脈動をたたえた有情物と化してしまふとの意でしようね。また、植物の美をくみとることのできる心は、豊かな詩趣^{ししゅ}を満々とたたえた大地に憩^いうのであり、大自然をこよなく愛する人の生命は、自己と同じく生の脈動を感じる有情の世界に生きることができる。

地球を愛し、地球のみごとな営みにまで想いをはせる人間の生命は、一個の

生命体と化した地球大の影をひいて生きている。宇宙の本源に達し、その内奥をきわめた哲人の生命は、宇宙のかなたにまで広がっているにちがいありません。自然を愛し、人生を愛し、地球や宇宙の本源にまで慈しみの心をもって肉薄する人の生命には、詩趣がうずき、科学の英知がひらめき、哲学心が芽をふき、宗教への抑え^{おさ}がたい願いがわきおこるはずです。

——それに関連することですが、興味深い話を聞いたことがあります。現代生態学の第一人者である宮脇昭博士の自然観は、まことに、独創的なものですが、博士の主張によると、自然にも、人間の顔と同じように、目やほおの部分があるということです。人の顔のなかでも、目は傷つきやすいところですが、ほおの部分は、風や雨にさらされても比較的抵抗力があると考えられます。大自然における眼の部分というのは、奥まったくぼ地、山の尾根筋、急斜面、湿原などであるとされています。もし、この部分に、コンクリートの道路を通すとすれば、それは、人間の眼に焼けひびしをつつこむようなものだということです。自然界の顔の、ほおの部分は強いところだから、うまく利用し、開発する

ことができます。

このように、人間の身体と同じように自然を診察し、診断していく生態学者の心に映る万物の姿は、もはや、死せる無生の物体ではなく、暖かい血潮に脈うっているのではないかと思われます。

池田 おもしろい表現だね。大自然それ自体も、本来、生命体としての性格をもっているということだね。大自然にたいじ対峙する人の生命に応じて、依報の姿は、現実に変化していく。つまり、人間生命を含めて、すべての生命的存在は、みずからの能動性や活動力に応じて、それにふさわしい環境をつくりあげ、それを影として生きているといえるでしょう。

ゆえに「身なくば影なし正報なくば依報なし」で、生命主体の能動性が消失すれば、それに対応する影としての依報も消えていかざるをえない。動物は動物としての影をひき、人間は人間としての影をとまっている。また、各個人の生命状態、境涯に応じて、影としての環境も異なっていくと考えられます。ところが、人間でありながら、動物のような影をとまっている人もいます。

その人の生命状態は、肉体的には人間の姿を示していても、動物の境涯に住んでいると推測せざるをえませんね（笑い）。願わくば、人間生命にふさわしい影をのこして、生涯を送りたいものだね。

生命のなかの交流

——先ほど引用された日蓮大聖人の『瑞相御書』のすぐ後の部分に、つぎのような一節があります。「かるがゆへに衆生の五根ごこんやぶれんとせば四方中央をどろうべし・されば国土やぶれんと・するしるしには・まづ山くづれ・草木かれ江河つくるしるしあり人の眼耳等驚きようそうすれば天変あり人の心をうごかせば地動す」との文です。

「衆生」という言葉は、一般には生物、とくに人間生命をさしていると思いますが、衆生の五根、つまり、衆生の生命自体が、正報であり、体としての位置をしめ、それを取りまく依報としての環境は影のごとき存在である。ゆえに、生命主体が破壊されていくことは、そのまま「四方中央」つまり、環境の破滅、

激変を呼びおこさずにはおかない、との文意であると思います。

だから、大自然が破壊されてしまうその前兆として、まず、山がくずれたり、草や木が枯れていったり、江河が尽きたりする。それらは、人間生命を色心ともに、驚愕^{きょうがく}させ、激動させていけば、天も地もともに変動をおこさざるをえないのだ、という一つの原理にもとづいている。まあ、一応はこういった意味に解することができると思います。さて、この文を、現今、私たちをとりまく種の状況と照らし合わせるとき、人類の絶滅さえひきおこしかねない現代社会と文明の悪の根源を、手にとるように映しだしているように思われます。とくに、日本列島では「山くづれ草木かれ江河つくるしるし」が、全土いたるところにあらわれています。

いまさら、実例をあげるまでもないほど、大自然の激変は、直接人間の生をおびやかしています。まさに「国土やぶれんと・するしるし」だと思うのですが、その元凶^{げんきょう}は、人間自身の生命のなかにひそんでいると考えられます。貪欲^{どんよく}や無知や自己中心的な自我の奴隷^{どれい}となり、人間としての生を失った人びとの行

為が、みずからを死におとし入れてしまう。のみならず、大地を剥ぎとり、氣候異変を呼びおこし、海の正常な活動を破壊して、すべての生き物の生存の根を、断ちきろうとしているように思われます。このような現状は「衆生の五根やぶれんとせば四方中央をどろうべし」の文のとおりです。

ところで、そのあとのところにも「人の眼耳等驚そうすれば天変あり人の心をうごかせば地動す」とあります。人間生命の働きが、環境に作用する場合、色法の世界での相互の関連は理解できるのですが、生命の内奥でも、主体とその依報は、たがいに影響しあうのでしょうか。

池田 きわめてむずかしい問題だね。人間のもつ自然観などが、具体的、意識的な行動を通して、環境に反映していくことは比較的納得されやすいと思う。自然観、人生観などとして色法の領域に顕現する生の能動性は、それをささえ、動かす生命内奥の世界と一体不二となって律動している。とすれば、心法の世界での依正の相互関係を無視しては、生命主体と環境とのかかわりあいをすべて解明したことにはならないでしょう。

——そこで、現代の自然観の代表として、ハイデッガーの存在論が、ある程度、参考になると思われます。ハイデッガーの自然観は、きわめてむずかしいし、また、彼独自の用語もあって、その説明から入らないと、十分には理解できないのですが、ここでは一応、私の理解していることを平易にのべてみます。それも、自然観に限ってですが——。

私たちは、ともすれば、自然界の調和のとれた動きに感嘆しつつも、その表面だけを考えがちです。しかし、ハイデッガーにとっては、宇宙万物が、このように秩序ある姿を示すのが不思議でならなかったのですね。まるで、一つの生命体のように動いている宇宙の姿に魅^みせられて、彼は、万物の調和を生みだす根源の實在に思いをはせるのです。まあ、それを「存在」の次元などといって表現しています。

「この、神秘を秘めた大宇宙の底流には、それを生みだす根源の實在があるのではなからうか——」との彼の思索は、ついに、大自然の母体としての実体をとらえ、それを「原自然」と名づけています。彼は「原自然」を想定すること

によつて、宇宙の神秘を明かしたと主張しています。

池田 大自然の底流を求めて思索する現代超一流の実存哲学者の努力が、いたいほどわかるね。彼の思索は、たしかに群を抜いて深い。しかし、その「原自然」が、私たちの生命自体をも含めて永遠に常住するものでなければ、万物の究極をさぐりあてたというには早計そうけいすぎるような氣もするのだが……。

——彼は、人間は死ねば、やはり無に歸してしまふ、と考えているようです。つまり「原自然」を、自然と人間の根拠としながらも、人間や生物などの生命自体を永遠の実在としては見ていないように思われます。

池田 彼のいう「原自然」は、仏法からいうと、宇宙律動の極致きぎくちとしての「妙法」と自然との中間的なものとして位置づけられるだろう。ハイデッガーのいう「原自然」の底に流れる永遠不滅の宇宙生命そのものが「玄宗げんしゅうの極地ごくち」としての「妙法」なのです。

——大宇宙自体が、一つの生命体である、という考え方は、一見、飛躍的のようですが、宇宙生命に内在する「妙法」そのものが、森羅万象として顕現

するのであると、とらえれば、明瞭に理解できますね。

池田 私が「かけがえのない宇宙」とのスローガンを提唱した真実の理由も、大宇宙が「妙法」の当体であり、万物の根源をささえる実在であるという思索にもとづいているわけです。

——日蓮大聖人の『諸法実相抄』（しよほうじつそうしやう）には、「下地獄（しも）より上仏界（かみ）までの依正の当体・悉く（ことごと）一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり、依報あるならば必ず正報住すべし、釈に云く『依報正報・常に妙經を宣ぶ』等云云」とあります。

地獄とか仏界とか十界という、この仏教独自の概念については、あらためて考察していきたいと思いますが、ここでは、宇宙森羅万象のすべての生命体と解釈しておきたいと思います。この宇宙のあらゆる生命的存在は、すべて「妙法」の現る姿にほかならない、といったような意味だと思えますが——。

池田 もう少し精密に思索すれば、色法と心法の領域における人間生命と環境の、ありのままの関係性が体得されるのではないかね。「依報あるならば必

ず正報住すべし」との一節も、たんに、依報と正報がともに実在しているという平面的な意味だけではないでしょう。つぎにのべられている「依報正報・常に妙経を宣ぶ」との釈と考えあわすとき、生命主体と環境とのダイナミックな律動が、妙法としての宇宙生命との関連のもとに、あざやかに描きだされてはいないだろうか。

つまり、万物の根源にあり、あらゆる法の活動となつてあらわれる宇宙生命内在の力と法、つまり「妙法」ですね。それが、宇宙の内奥から、しだいにその具体的な働きを顕在化するにつれて、各生命主体が個別化し、同時に依報としての環境が形成されるのだといえるでしょう。正報と依報は、宇宙生命自体に秘められた発動力と能動性があらわれるとともに、同時に形づくられていく実在であり、本来、不二のものの、色法の世界における二つの差別相と考えられるね。正報としての人間生命の形成は、その依報の顕在化の過程だともいえる。動物や植物の発育、生長は、彼らの住む世界の形成と分離することはできないでしょう。

結論していえば、生命主体とその環境は、現象世界においては、二つの実在とあらわれていても、内奥においては渾然こんぜん一体となり、宇宙生命自体として脈動している。しかも渾然一体とは、たがいに融合しつつも、そのなかに、あらゆる生命的存在と、その環境を生みだす力と法をはらんでいるという意味です。各生命主体へと個別化し、個性化する発動力を内にもち、能動性を秘めていながらも、一体となって律動しているのが生命の本質でしょうね。

したがって、一つの生命主体の能動性の変化は、生の内奥においても、他の生命的存在に重大な影響をおよぼすと考えてよい。さらに思索を進めれば、大自然や宇宙自体も生命的存在と考えられる以上、一人の人間生命の波動は、あらゆる生き物の生の根源をゆるがすのみならず、無生物とされている存在の基底にもおよびうるものと考えられるのだが……。

——私たち人間の生命が、心法の世界において、他の生命に影響を与えうるという点について、興味深いデータがあります。むしろ、科学的方法による実験ですから、現象世界における分析を通じての推測です。実験のやり方には、

研究者によつて、さまざまな方法があり、いちがいにはいえないし、また種々の複雑な手続きがあるのですが、簡略にするために、私なりに整理した形で述べてみます。

実験には、二つの部屋を使い、その間には二百メートルの距離があります。連絡は、二つの部屋を結んだ電線を通じてのブザーだけです。一つの部屋に、学校の先生が入り、他の部屋には生徒が入ります。ブザーが鳴ると、先生は机の上におかれたカードを繰り、そこに書かれた数字なり、絵を、他の部屋にいる生徒に送ります。送るといっても、カードを見せたり、特殊な信号を発するわけではありません。心のなかで、数字や絵を、一生懸命に念じるのです。生徒の心に通ずるように念じつつけるのです。生徒はあらかじめ打ち合わせた時間どおりにカードを繰っていきます。生徒の繰るカードが先生のカードと一致する時もあれば、はずれる場合もあります。このような動作をできるだけ多くくりかえすのです。

私たちは、カードが一致するのは、たんなる偶然だと思いがちです。もし偶

然ならば、統計的な確率にしたがうはずです。ところが、数人の生徒に、この実験を行なってみると、まことにおもしろい事実が判明しました。先生と生徒が、たがいに好意をいただき、尊敬しあっている組み合わせでは、非常にあたる率が高いのです。また、生徒が、先生の心が通じてくると信じている時も同様です。反対に、先生に敵意をいただき、不信感をいだいている生徒の場合は、カードが一致する確率が低くなるということです。

もし、この二つの場合におきる確率が、たんに偶然だけにもとづくものとするれば、百万回実験して一回ぐらいしかおきないであろう、と学者たちは計算しています。つまり、偶然だけでは生じえないといってもいい現象だということです。超心理学者たちは、先生と生徒の間に、それぞれの心の内奥での交流がおきていると考え、それを「遠隔感応^{えんかくかんのう}」または「テレパシー」と名づけています。テレパシーなどという言葉を使うと、非常に神秘的に感じる人がいるかもしれません。また、テレビの見すぎじゃないかといったとり方をする人もいますでしょうね（笑い）。でも、立派な学術用語でして、原理的には感覚器官を通さな

いで、人と人との間に伝達が行なわれることと定義されています。

このほかにも、超心理学では、たとえば、目や耳を使わないで物を認知する“透視”といったものから、手や足を使わないで物を動かすといった“精神的遠隔操作”など、未来のことをある程度、予知することなどが、種々の実験にかけられ、その一部は確かめられています。しかし、まだ十分に納得できないことも多いですから、こんごの成果を待つほかはないわけですが、でも、最小限、つぎのことだけはいえそうです。

二十世紀も後半に入ったこんにち、生命内奥での絶妙な働きを否定することは、かえって非科学的と考えられるようにさえなりつつある——と。

池田 先生の心の波動が、確実に、それぞれの生徒の生命に伝わっていくという貴重な実証だね。

——そういえば、よく“虫の知らせ”があったとか、予感がしたなどといわれますね。このような現象も、まったく否定してしまうことはできないと思うのですが……。

池田 予感などというと、死とか事故の予感など悪いことを、すぐ連想しがちだが、良い例も多いね。今までぜんぜん思ってもいなかったのに、急にその気になって親しい友人をたずねたとしよう。と、その友人がおどろいて「君が来るような予感がしてね。会いたいと、きのうから思っていたんだよ」といったような話も、たびたび耳にするものだね。たとえば、口に出し耳に聞くといった五官を経ないでも心の奥の次元で、直接に親愛の情が通じあっていた例とはいえないだろうか。少なくとも、二人の生命は、その奥底でたがいに引きあっていたのであり、そのような状態が、行動としてあらわれたと考えることはできるはずだ。

人と人との生命の内奥には、信頼や愛情で求めあう力の交流もあれば、逆に不信感と憎悪で反発しあう力がうずまいていることもある。正報と依報の関係でいえば、生命主体とその環境は、その生の内奥で渾然こんぜん一体となり、融合しつつも、たがいに影響をおよぼしあっています。生命主体の能動力と、依報としての他の生命的存在はたんに物質的な面だけでなく、内面的にも交わり、たが

いに交流しあっていく。一人の人間の発する波動が、生の内奥において、他の人間生命の心底をゆり動かすことだけはたしかです。

むろん、現実問題としては、その人の能動性の強さと質（笑い）、および他の生命体の状況、境涯などの複雑な条件が重なってくることを考慮しなければならぬでしょう。また、すべての生命的存在は色心不二の当体だから、現実には、色心ともに影響しあっていると考えねばなりません。それにしても、私たちの内奥の動きが、他の生命的実在に影響をおよぼしうるという事実が、仏法以外でも立証されはじめたことは、偉大な成果の一つだね。

——超心理学者のウォータリー・キャリントンも、ユングと同じく「集団心」の説をとえ、人類の心はその底流で融合しつつ一体となって律動している」と主張していますが、これは私たちの立ち場からいえば、仏法の洞察に一歩近づいたといえるのではないのでしょうか。

また、ハイデッガー哲学の基盤ともなったギリシャにおける自然観では、人間と自然とは、本来、同質であり、人間は自然の内部に入りこめると考えてい

たようです。ギリシャ語では、自然とはフュシスとかコスモスですね。つづりは *Physis, Cosmos* となりますが、とにかく、宇宙と同じ意味なのです。その宇宙、自然のうちに生命があり、自然は生きているものであると考えていました。自然も、そこに生息する生物や人間も、ともに生きている。そして、これらの間に、もし対立することがあっても、それは新たな調和を生みだすための相克であり、対立だというふうにとっているのです。

だから、自然も人間も他の生物も、同じ生きものとして対等に、しかも平等に心をかよわせるというか、生命の交流ができるのです。でも、人間の心と自然との具体的な内面の交わりについては、それほど深くは考えていなかった。このあたりは科学も各種の哲学もまだ未踏^{みどう}の領域といえそうです。

池田 そうだね。だが、仏法の「依正不二」論からすれば、一人の人間生命の波動が、他の生命的存在をゆさぶり、民族の心や人類の底流をさえ変えていくことはとうぜんと思われる。さらに、人類の心はたがいに融合しつつ一体となつて、他の生物や大自然そのものの実在に、色心ともに影響力をおよぼしつ

づけるでしよう。

科学や哲学は、少しずつではあっても、やがて、人類の「集団心」と他の生物や大自然との本源的な関連にまで、考察の光りをさしこんでいくものと考えられます。

——それにしても、一人の人間生命の影響力が、少なくとも、人類全体の内奥にまでおよびうるとするならば、正報としての生命主体の確立こそが、民族と人類の未来までも左右するのですね。

池田 私たちの住む大宇宙の秩序ある変転のなかにあつて、各個人が、いかなる生命状態にあり、どのような能動性を発現しうるかに、人類と地球の運命がかかっているといえよう。万物の調和のリズムに眼を開き、あらゆる生き物と共存しようとする人間生命の姿勢は、宇宙に張りめぐらされた「生命の糸」の働きをささえ、新たな宇宙の創造へと向かつていくでしよう。

人類の心は、愛や信頼や慈悲心にみたされ、その脈動が生命体としての自然を創造の営みへと導いていくにちがいない。こうした大宇宙の一箇の生命的な

営みは、「かけがえのない宇宙」の律動をまもり、ささえようとする人間生命を、こんどは逆に、「かけがえのない一個の生命体」として慈しみ通すと考えられます。「依正不二」論の人間らしい実践のあり方だね。

逆に、私たちが、みにくい貪欲や愚かさやエゴイステイックな自我のままに、敵対し、憎しみあい、殺害しあうとき、どす黒い「殺しの血」に衝き動かされる「狂った細胞」としての人類の心は、他の生物と大自然を破壊し、万物をささえる「生命の糸」をずたずたに断ちきってしまうでしょう。大自然が崩壊し、地球が死と暗黒の惑星に姿をかえてしまう状況に直面して、個々の人間の生もその根底から断ち切れざるをえないはずです。

このいずれの道を選ぶかは、私たち人間の自由であり、また、その能力も本来、人間の生の内奥にそなわっている。要は、人間生命に内在する、宇宙を生創造に向かわしめる発動力と能動性を、いかにして開発し、顕現するかです。もし、一個の生命主体に、愛や信頼心がそなわっていたとしても、その発動力が弱ければ、他者を動かし、生命の波動をおよぼすことは、きわめて困難で

しよう。また、いかに能動性が強くても、疑念、不信、敵愾心てきがいしんなどにみたされていれば、人類も自己も滅びさるだけでしよう。

「かけがえのない宇宙と自己」を、生の創造へと導く発動力と能動性を顕現させるような人間の生き方と、真に、宇宙の律動りつどうと協調しつつ生を営む人間らしい境涯を、さまざまな角度から明確にしえたとき、「依正不二論」は、人類救済の偉大な実践哲理として、人びとの行動のなかに生かされるのではないだろうか。

生命をとらえる眼

夢の実体は？

——少し前の話になりますが、夏目漱石の小説『夢十夜』にでてくる夢の話、あれは本当の夢のことを書いているのか、それとも創作なのかで話題になってきたわけですが、それを大脳生理学で「本当の夢を書いたものらしい」ということになって、注目されたことがあります。徳島大学の松本淳治教授が研究した結果なんですが、「真白いほお」「大きな赤い日」「闇だのに赤い字」など文中にあらわれている色をはじめ、視覚、聴覚、嗅覚などの頻度ひんどうも通常の夢と同じ分布をしていることなどから結論したそうです。

文学の世界にまで大脳生理学が乗りだして分析するとなると、いくぶん詩的興きようしゆ趣が失われて、芥川龍之介の『侏儒の言葉』のなかにあるように「地球は何

度何分回転し」といったふうになってしまうような感じがしますが、それとは別に、作家の思わぬ心の内面がうかがえることもあって、また違ったおもしろさがでてくる可能性もあります。

そういったこともあって、『夢十夜』をもう一度読み返してみたいんですが、そのとき「夢」というものは、まったくおもしろいものだ、とつくづく感じました。非常に現実から離れた展開を示しますし、飛躍ばかりする。結論もあってないようなものです。『夢十夜』の場合は小説ですから、ある程度の脚色きやくしよくはあるようですが、現実の夢には、ほとんど一貫性はありませんね。それでいて、妙に心の奥底まで見透みすかされているというか、内面に隠れている、あるいは隠しておきたい部分があらわされているようです。といって、覚えてしまえば、現実生活とは、ほとんど関係がない……。と、まあ、こういつてしまえば、フロイトの『夢判断』に書かれたことなどをあげて、反対する人もいるかもしれません……。。

池田 眠っているときにも、外からの刺激には反応しているのだらうね。

——はあ。たとえば、フロイトのあげていますが、鼻の先を筆や羽毛でくすぐると、拷問の夢を見たとか、ハサミでピンセットをたたくと、夢のなかで鐘の音が聞こえたりするそうです。こういった関係は、いちおう成り立つそうです。でも、現実におこっていることと夢の内容は、まったく違いますね。また、ときには、心のなかで、無意識にですが、ずっと執念深く（笑い）想っていたことが、ちよっぴり夢のなかに顔をだすこともあります。まあ、それでも、現実とは関係がない。その思いが、まさしく現実になることはあるでしょうが——。

——私は、あまり夢を見たことはないんですが……。といっても、脳波を検査すると夢を見ていないのではなく、夢は、だれでも見ているのだけれども、それを記憶していないだけらしいのですが、夢というのは、とにかく奇想天外ですね。しかし「寤^{うつつ}」と比較されて、現実味のない典型とされる「夢」が、じつはその「寤」ともっとも縁の深いものであることを、フロイトが明らかにしだしてからは、夢が、心の深層部分を垣間^{かいま}見させてくれる格好^{かつこう}の材料だとわか

ったわけです。

しかし、覚えてしまえば、現実生活とはほとんど関係がない。生命のもっとも深い部分と密接していながら、日常には、ほとんどあらわれてこない。いたい、夢というのは、どういうものなのか、とらえどころのないような気がします。

池田　今回は夢談義だね（笑い）。たしかに、夢というのは、ちよつと常識では理解できないことが多いが、これも夢に限ったことではないと思う。たとえば、人間の意識とか心とかいうものの自体すら、とらえどころがない。「身体と心」の章でもふれたが、人間の精神作用は、肉体をその発現の「座」にしていることは疑いない。では、そのなかのどこにあるのか。「心の内」とか「腹黒い」とかいつても、心臓や胃にあるわけではもちろんない。では脳細胞にあるのか。脳細胞そのものが、意識とか心であるとはいえない。脳細胞はそれらの発現の「座」であり、場であるにすぎない。意識、心そのものは、身体のどこを^{さが}搜しても、どこにも存在しないでしょう。しかし、身体を離れては一瞬も形

成されない。

——身体を座としていながら、そのもの自体を明確につかむことができないという意味では、夢における意識とか心とか精神の働きも、寤^{うつ}におけるそれらも同じだということですね。

池田 寝ていて身動きしない自分が本当なのか——といっても、夢を見ている時には、眼球なんかはぐるぐる動いているそうだが——夢のなかで自由に動き回っている自分が本当なのか。夢は睡眠中の精神活動だから、幻のようなもので、関係がないといってしまうえば、それまでだが、そうばかりはいいきれない。また夢のなかでの自己は、苦しんだり、喜んだりしている。外見はどうあろうと、生命の起伏は厳然としている。

仏法には空^{くう}という概念があります。有か無かを超えた考え方ですね。夢という現象は、この空という概念を理解するための糸口になると考えていいでしょうね。

——夢が、通常概念でとらえきれないということは、いいかえれば、時

間・空間の物差しでは、とらえられないということにもなりますね。常識的に考えても、夢には、時間とか空間という枠組みはないわけです。といていいすぎならば、少なくともくずれている。時空概念に秩序だてられる以前の混沌の状態ともいえます。では、そういう状態を、どう把握すればいいのか。夢という象徴的な事柄から話が始まりましたが、生命現象のいつさいを解明するのに、仏法の知恵は、どのような物差しを考えているのか、ここでは、こういったことを中心に話しあっていききたいと思います。

変転きわまりなき世界Ⅱ 仮Ⅱ

——空という概念が仏教独自のものですので、その空とか、また、その他の仏法の認識方法をのべた日蓮大聖人の著作から、参考になる個所を選んでみました。そこでまず『十如是事』^{じゅうにょぜじ}には「我が身が三身即一の本覚の如来にてありける事を今経に説いて云く如是相^{にょぜそう}（中略）如是本末究竟等文。初めに如是相とは我が身の色形^{しきぎよう}に顕れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱^{げだつ}とも又は仮^け諦^{たい}とも云うなり、次に如是性^{しやう}とは我が心性^{しんしやう}を云うなり是を報身如来とも又は般^{はん}若^{にや}とも又は空諦^{くうたい}とも云うなり、三に如是体^{たい}とは我が此の身体なり是を法身如来とも又は中道^{ちゆうどう}とも法性^{ほつしやう}とも寂滅^{じやくめつ}とも云うなり」とあります。だいぶ、仏教用語が入っていますが、このなかで「仮諦」と「空諦」と「中道」という言葉に着

目して考えていきたいと思ひます。「中道」は「中諦」ともいいますから、この三つを合せて「三諦」というのですが、ここにあらわされている空^{くう}假^け中^{ちゆう}の三諦が仏法の認識論の根本的なものです。

池田 「諦」というのは「審^{しん}諦^{たい}」ということ、^{「あきらか」}という意味です。

空・假・中の三つの立ち場からものを見ると、生命の本質、さらに広くいえば、宇宙の森羅万象の実相がごとく明らかになるということでしょう。

これはおもに天台が確立した真理観だけでも、仏法がものを見るのに固定した視点からすべての現象を判断しようとするのではなく、柔軟^{じゆうなん}な姿勢でものを把握しようとしたことがうかがえる。また、そうでなければ、生命のような、とらえどころのない、混沌^{こんとん}としたものの本質を見きわめることはできないという事です。

——少し余談になるかもしれませんが、数学においても、いまいわれたようなことがいえます。たとえば、ユークリッド幾何学の有名な「直線外の一点を通じて、その直線に平行な直線は一つあって一つに限る」という第五公準は、

長いあいだ、人びとに絶対の真理と考えられてきたわけですが、それも空間の一つの見方、立ち場であつたわけです。平行線は無数にあると考えても、一つの幾何学ができあがるし、また、逆に一つもないと考えてもよい。

たとえば、球の表面を平面と考え、球の大円——つまり球と球の中心を通る半円とが交わつてできる円——を直線と考えた場合は、直線外の一点を通る平行線は一本もない。逆に、馬の鞍くらのような平面を考えると、平行線は無数にあることになります。非ユークリッド幾何学(注8)がそうしてできあがっているわけですが、それが立派にアインシュタインの一般相対性原理(注9)の証明などに役立っているわけですね。現代数学、物理学などは非ユークリッド幾何学なしには考えられなくなっています。

というより、現実の宇宙空間自体が非ユークリッド空間ではないかとさえ考えられている。たとえば、アインシュタインは「有限ではあるが限りがない」という奇抜きばつな四次元空間が、この宇宙の実像だといっています。まっすぐ上へ上がりつづけると、宇宙の「縁」をまわつて、もとへもどつてくるというので

すね。

——私、よく、やさしく書かれた物理学の書物を見るのですが、そこに、この有限ではあるが、しかも限りがない、ということの説明するための図が描かれてあります。それを見て、宇宙というのものもこんなものかな、と少し実感がわいたのですが、その図では四次元より一つ次元をおとしまして、三次元で説明してあります。四次元だとちよつと図に示すことがむずかしいんでしょうね。それは、ちょうど、風船玉がありまして、そのうえを一匹のアリがはっていく。アリは、その風船玉の表面を一生懸命に歩いていく。とうぜん、ひとまわりすれば、もとのところへもどっているのですが、それでもまだ歩いていく。いくらでも前へ進めるのですね。だから、限りがない。しかし、もとにもどって何回も同じところを回っていますから、有限なんですね。アリには、それがわからない、といったようなことです。

——そういう図がよく示されていますね。まあ、一つの参考にはなるでしょう。ところで、数学とは少し違うかもしれませんが、とくに生命、宇宙とい

った本質的なものを的確につかもうとすれば、固定的な見方ではとらえきれないものがあるのではないでしようか。

——たとえば、緑色のかかったサングラスをかけている人には、世界全体が緑がかって見える。もちろん、そんなことはないでしようが、もし生まれ落ちたときからサングラスをかけられていたら（笑い）、その子は、世界はそういうものだと思いこむはずです。それでも立派に一つの世界観が構成されていくわけですが、それでは世界を正しい色彩でとらえてはいない。

同じように、ある一面の見方だけで宇宙や生命について、一つ概念を構成しえたとしても、それが宇宙と生命の全体的な把握といえるかどうかは疑問ですね。精神とは脳神経細胞の様態であると考えたり、森羅万象をすべて分子、原子の状態に分割して考えたりしても、それはそれで一つの世界像は構成されるところでも、あくまでも一面の真理であって、総合的な把握とはいえないと思うのです。

池田 これから空・仮・中のそれぞれの見方を話しあっていききたいと思うけ

れども、仏法のこうした柔軟な見方が、これまでは、逆に「あいまい」であるとして、^{かろ}軽んじられたり、非科学的だとして、排されてきた傾向があるね。とくに、仏教經典では、神秘的、詩的、抽象的、^{ひや}譬喩的な表現が多く用いられているため、そうした本質がよく理解されなかった面があるのではないだろうか。その点、西欧哲学や科学の、イエス・ノーのはっきりしている厳密な論述の仕方は、あいまいさがなく、明快なところから、より強く受け入れられてきたともいえるような気がする。しかし、こうした特質をふまえたうえで、仏法の柔軟な、多面的な、直観的なものの見方というものが、そろそろ見なおされていかなければならないのではないかと思う。科学の発達が、生命・宇宙のますます複雑微妙な諸相を明らかにしていきつつある現状は、東洋的とくに仏法的なものの見方、知恵を強く要請^{ようせい}していることを、私は痛切に感ずるのです。

——それでまず「^け仮」ということですが、先ほどの『十如是』には「我が身の色形に顕れたる相」とありますね。「色形」とは、私たちが現実世界に「延長」としてとらえることができるもの、いわば空間的な広がりとして把握

できる側面をいうと考えられます。

——もちろん、色形といっても視覚に限られるのではなく、科学の「眼」でとらえられるもの、たとえば、電子顕微鏡けんびきょうでは、原子の単位まで観測しうるようになっていますが、それらも含まれているわけですね。

——いや、それだけではないですね。音波としてとらえられるものなども、色形と考えてよいのではないでしょう。

池田 それらを含んで「量」として測定できるものすべてを「色形」と考えていいでしょうね。それを「仮」と見るのが、仏法の考え方なのです。つまり「変化」という見方ですね。あらゆる現象が変化してやまない、仏法的な表現をすれば、「因縁によつて仮かりに和合している」のだ、という認識の仕方です。

——「仮」と見るのが、おもしろいですね。

池田 そう。現実相を見るのが仮だけれども、その奥に真実があるという発想が、この「仮」という表現にあらわれているね。しかし、たしかに宇宙、森羅万象の現象は、ことごとく移ろいゆくものであることは疑いない。これは人

間生命とても同じです。成住壞空、生住異滅、生老病死、それぞれ一瞬もとどまることのない世界・生命の諸相を分析している。なのに、それが変わらな
いものだと思いこみ、執着するところに不幸の原因がある、というのが仏法の
思想です。そこでいっさいは転変常無きものだとしても、この無常の世界にど
う対処するかが問題です。

それをどう乗り越えていくか。逃避するののか、挑戦するののか。以前、書いた
ことがあるのだけれども、諸行無常というのは、人生のはかなさ、榮枯盛衰を
示す諦觀主義だと、現在では受けとられているが、本来は、変化してやまない
森羅万象の動きの本質を見つめるところに、真実の幸福への鍵があると説いた
卓見なのです。

——そういえば、諦という字も、「あきらめる」すなわち、明らかに見る
という意味であるにもかかわらず、放棄するとか逃避するというように考えら
れていますね。明らかに見た結果、自分が無力であることがわかって逃避した
のでしょうか（笑い）。

池田 それはともかく、仏法においては、そのように、宇宙の森羅万象を「^{かり}飯」であると見ながら、しかもそれが「和合」していると認識している。衆生というのは、五陰^{ごおん}が飯に和合した姿だというのですね。

——「身体と心」の章で、放射性物質を使つてのデータをあげたことがあります、人間の身体は、一瞬一瞬、新陳代謝をくりかえしていることは事実です、たえず外界と接触し、外界のものを受け入れ、こんどは外界へ働きかけていく。

したがって一つ一つの細胞、つまり、原形質と核とからなっている総和が一個の人間を形成していると考えると、一瞬一瞬、人間は変わっていくと考えざるをえない。仏法では、これを五陰^{ごおん}仮^け和^わ合^{ごう}というのですけれども、この五陰とは、色^{しき}および受^{じゆ}・想^{そう}・行^{ぎやう}・識^{しき}という外界からの受容、それに対する発動という精神面の働きも含めて、それらが和合して衆生をつくる。つまり人間とか生物なんかをつくるという、一步思索を深めた考え方です。ですからAならAという人間があれば、それは五陰、すなわち色受想行識が飯に和合している姿だと

いうのですね。しかし、その五陰そのものについては、このてい談のなかで、いつかまた、くわしくとりあげたいと思いますので、ここではあつさりとおぼしておきます。この五陰という考え方は、衆生、つまり、人間生命をはじめとして、いっさいの生物体をつくりあげている要因になるものだと思いますが、その和合体がAという一個の独立した生命をつくっている。しかし、それは「仮」に和合したものですから、つねに変化しているわけですね。

池田 宇宙そのものさえも、刻々と変化しゆくものであることは、現代の天文学が明らかにしていることです。だいたい、現在の宇宙は、二百億年ぐらい前から膨張ほうちようを始めたというのが、定説になっているね。G・ガモフなどは、そういうした爆発説をとっている。そのほか振動説もあるが、それとても現在の宇宙が膨張しているということは否定のしようがない。一時、話題を呼んだ定常宇宙ていじよう説は、こうした爆発や振動を否定し、たえまない物質の創造によって、宇宙は定常状態をたもつと主張したけれども、難点も多いし、この宇宙論でも、大宇宙が固定した、まったく動かない存在だということはいっていない。たえず

流動し、膨張しつつも、大局的に見れば、大宇宙は変化しないと説くだけだからね。

——私たちが、いま見ている夜空の星座も、天文学でいった場合の宇宙の創成期、といって悪ければ二百億年前の、全宇宙が集まった超過密状態ちようみつたうの時には、まったくなかったわけですし、どんどん変化して現在のようになった。これも何億年と経てば、まったく変わってしまうことはたしかです。北斗七星の「ヒシャク」もひしやげてしまうでしょうし、オリオンの三つ星も内部分裂をおこしてしまうかもしれない（笑い）。

——星雲自体も、非常に長い期間をかけて、生住異滅しょうじゅういめつのコースをたどっているのでしょうか。大爆発をおこしているカニ星雲などは、現在、地球にいる私たちにとって、爆発していると観測されているのであって、あれは四千二百光年も先ですから、四千二百年前の出来事で、現在あそこへ行ってみれば、といっても行けませんけれども（笑い）、どうなっているのかわからない。逆に、現在私たちにはまだ観測できませんけれども、宇宙のそこかしこで、どんどん

新しい星雲が形成されているであろうことも、十分考えられるわけですね。数千万年とか百億年というような長大な時間をかけて、姿を変えていつています。

池田　それが一つ一つの星という単位になると、もっと忙しくなるね（笑い）。

それでも地球でさえ、すでに五十億年を過ぎています。現在は安定した壮年期の星だが、やがては、太陽に呑み込まれたりして死を迎えるのは明らかです。宇宙空間にただよっている星間ガスが集まって恒星や惑星をつくり、それが、やがては安定期を過ぎて爆発したりして一生を終えることは常識とさえなっている。その星の最後の状態を超新星と表現しているのは、輪廻りんねの思想を暗示しているとおもしろい。

——こうした星にくらべて、人間の寿命などは問題ではありません。人類そのものの歴史も、地球上に生まれた生命の歴史から見ると、つい最近のことです。いわば新参者というわけで、生物の歴史のなかの最後の一瞬、もともと現在を最後としてですが、そこにあらわれたのが、人類ということになります。地球の歴史を一日二十四時間とすると、人類が出現してからは、まだ四十

秒程度しかたっていないませんし、生物誕生の瞬間からを一日と考えても、せいぜい五十秒という短さなんです。そう考えると、この現実の世界が「仮和合」だというのは、強い実感をもって迫ってきます。

——物質を構成している基本単位の原子、分子、素粒子そりゅうしとなると、われわれの想像を超えていますね。素粒子、これは物質を構成する根本、究極の粒子だろうということで名づけられたわけですが、素粒子の一生は、一秒の数千万分の一ぐらいの単位になっています。

一瞬の人生といいますが、素粒子の寿命は、私たちが一回瞬まはたきする間もないわけで、じつに短い一生です。高速で走っている素粒子は相対性原理のおかげで、寿命が二倍も長くなったりするということがありますが、長くなるといっても、数千万分の一秒の二倍ですから……（笑い）。

池田 たしかに「色形」を追究していくと、そこには変転かぎりない様相がうかびあがってくる。仏教經典には、女性に心を動かされる修行者に対して、その女性が白骨になった姿を想像して、執着を断てと教えたところがあるけれ

ども、それは小乗的な発想でありながら、動き、生滅し、発展しゆく色法の世界の本質をとらえているね。

そうでありながら、みごとに和合の姿をとっているのが、生命のすばらしさだと思う。原子や分子の単位で考えるなら、それぞれはまったく無機物質であり、素粒子にまでいたると個性さえもないことになる。それらが、単純なものから複雑なものへと構成され、連鎖れんさしていつて、複合体をつくっていく。人間という複雑きわまりない生命体になると、膨大な量の情報によってつくりあげられているわけだ。

——五十億ともいわれます。

池田 その五十億もの情報によって、われわれの身体は精密微妙に構築されて、意識をもち、喜怒哀楽きどあいらくを感じることができるわけだね。仏法の「五陰仮和合」という表現は卓見としかいいようがない。さらに、地球も一個の超生物と考えられるし、大宇宙が一定のリズムをもって運動している姿、生命をいたるところで育はぐんでいる姿も、和合というか、調和への方向性をもった大生命と考

えることができるのではないか、と私は思うのだが……。

——物理・化学においては、「エントロピー増大の法則」というのがありまして、わかりやすくいえば、秩序から無秩序へと世界は移行すると説明しています。エントロピーを一言で表現するのは、むずかしいのですが、不規則性とてもいったようなものです。つまり、あらゆる現象を見ると、長い時間では規則的なものが、じよじよに不規則になっていくというのが、エントロピー増大の法則なのです。

たとえば、大きな箱の片隅にビリヤードの球を、たくさん置いておき、その箱をゆすると、長い時間には、その箱に一樣に散らばってしまう。また、熱いものと冷たいものが、だんだん差がなくなって同じ温度のものになってしまう。運動エネルギーは、どんどん熱エネルギーに変わって、それがすべて運動エネルギーにもどることはない。こういう不可逆の世界に在るというわけなんです。大宇宙の単位で考えますと、爆発説では、エントロピー増大、振動説によると、現在はエントロピー増大の時にあたるわけですが、収縮すると、エント

ロピ―減少になります。定常宇宙説では、エントロピ―不変となりますけれども、局部世界では、つねにエントロピ―増大の法則はたもたれているようです。ところが、生命を形づくるというのは、いわば、エントロピ―減少ともいえる作業なんです。無秩序から秩序へ、拡散から収縮へという動きです。先ほどもいわれましたように、宇宙空間に散らばっている星間物質が、どうして集まって星をつくっていくのか。その契機はなんなのか。そういったところまでは、現在の天文学でも探りきつてはいないようです。こうした生命を生成する動きは、まさに「和合」だという感じがします。

池田 宇宙森羅万象の「色形」は「仮」であるから、一刻もとどまることがなく、それに目を奪われているだけでは、本質はわからない。したがって「仮」を追っているだけでは、片寄ったものの見方になる。そこで、こんどは「空」という考え方に入ってくる。というより「色形」を「仮」たらしめる発想は、じつは「空」にこそあるのではないだろうか。「空」の概念は仏教独特の発想であるわけですが、仏法の深さはここにあると思う。

時空の枠組みを超える「空」

——一般に、「空」は「有」と「無」の見方を超えたもの、「有」といえば「無」であり、「無」といえば「有」である状態といわれています。禅問答じみていますが、では「空」とはなにか。日蓮大聖人の『十如是事』には「如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は空諦とも云うなり」とありますが、私たちの性分とか精神とか心理などを指しているようですね。

池田 逆にいえば、あらゆるものの性質、性分は「空」だということです。

この空という概念は、非常に誤ってもちいられ、あるいは解釈されている。微妙な概念だから、表現も単純ではなく、西欧の人びとから見ると、仏教が、いったいなにをいっているのかわからない、と首をかしげざるをえない代表的な

言葉とされているようだね。日本人でさえ、この「空」を正しく理解している人は皆無と考えていいのではないかな。

戸田前会長が、ある仏教学者が外国の人に「空」の概念を説明するのに、そこにあつた折り鶴だったかなにかを、くしゃくしゃとつぶして説明したのを、「空」の概念に対し、誤解を与える説明だといわれていたことがあつた。たしかに、紙をつぶして説明したのでは、いったい、空とはなんなのか、さっぱりわからないだらうからね。

そうでなくても、現代人は「有」と「無」の二つの物差しで、すべて説明されなければならないと考えがちなのだからね。ところが、冒頭の夢の話にもあつたように「有」と「無」という単純なカテゴリーだけでは包含できない存在があることもたしかだ。

——「有」と「無」という判断基準は、いわば、私たちが日常もちいている時間・空間の概念と同じですね。カントが「人間は時間と空間のワクを通して外界を認識する」といっているとおりです。私たちは、物を認識し、測定し、

計算するのに、時間と空間という物差しをもちいています。空間にはタテ、ヨコ、高さの三次元がありますから、それと時間とをあわせて、四つの物差しさえあれば、仮の世界は容易に追跡できるわけですね。ところが「我が心性」となると、こうした時間・空間の枠組みわくぐみを超えています。したがって「有」と「無」の範疇はんちゆうには入らないわけです。

池田　そうだね。「我が心性」というものは、たしかに、その存在を否定することはできないが、あると思って追究してみても、心性自体は、色も質もないものです。しかし、「無」かと思うと、心は千変万化の姿をして「色」の表面にあらわれいでる。したがって、「有」と決定するわけにもいかないし、「無」と決定するわけにもいかない。「有」か「無」かという概念からは説明できないわけです。

——この「空」というのは、「有」に対する第二の概念というより、「仮」の世界を説明するのと同じ発想であり、「有」と「無」で一つの問題と考えられますね。「仮」の世界は「有」「無」の次元で追究できる。しかし「空」の

世界は「有」「無」の次元ではとらえきれない……。

——私も、そうだと思います。ところで、この「空」は「我が心性」だけでなく、物の「性質」あるいは「本質」といったことは、すべて「空」といえますね。たとえば、ダイヤモンドも炭も同じ炭素からできています。ところが、同じ炭素でありながら、その分子の配列によって、ダイヤは、炭とは似ても似つかないものになっている。このダイヤをダイヤたらしめている「本質」、これは「空」の概念でしかとらえようがない。

池田　そう。また、戸田前会長が「怒る」という「心性」で「空」を説明されたように、ものごとの「性質」は、すべて「空」という状態であるわけです。怒れといわれても、どこにもその実体はない。ないのかというと、縁にふれていくらでもあらわれてくる。したがって「無」ではない。では、あらわれてこない時はどうなっているのか。仏法では、これを「冥伏」みょうふくという表現で説明しているね。これに対して、色法の世界にあらわれているのを「顕在」けんざいという。外界の種々の縁によって、冥伏と顕在のあいだを往来している性分が「空」だ

といえるでしょう。

——ところで、この「有に非ず無に非ず」式の表現は、仏法では非常に多いですね。小説『人間革命』にも引用された、『無量義經』の文などは、「其の身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず縁に非ず自他に非ず、方に非ず円に非ず短長に非ず……」と、ずらっと三十四も否定ばかりならべて、結局「仏」「生命」というものを説明しようとしている。こうした表現が「空」をとつつきにくいものになっている原因の一つのようですね。

池田 そう。それが、有に非ず無に非ずで、無という解釈を否定しているにもかかわらず、結局は「無」に近い感覚でうけとられている原因でしょうね。

ところで、このように否定形で表現しようとしたのは、もちろん、空が有無の概念を超えているからだけれども、もう一つは、既成の価値判断の枠組みを否定しようとしたことにあると思うのです。たとえば、生命の奥深くにある無意識というか、日常生活に直接にはあらわれてこない広大な精神の世界を説明しようとする、すぐせつかに、それは、物質的欲望なのか、性の衝動なの

か、神経細胞でいえば、どの辺の作用なのか、というように既知の内容の枠組みに押しこめて理解しようとしてしまう。ところが、この広大な精神の世界は、それらの既成の概念には入らない新しい世界なのだということを示さなければならぬ。それには、まず、それまでに用いられてきた認識の枠組みを否定することから始めなければならぬわけです。それが「非」の羅列（られつ）という表現法になったのだと思う。したがって、『無量義經』の「非」も、たんなるネグレクト（否定）ではない。既成概念へのネグレクトであり、皮肉ない方すれば、通常のネグレクトに対するネグレクトだといえないこともない。

「仏」というと「どういう姿をしているのだ」とすぐくる。ところが、生命そのものののですから、こういう姿をしているというようなものではない。「方に非ず円に非ず短長に非ず……」式の表現になったのだね。

——色法の世界を「仮」として突き放していくと、どうしてもペシミズムにおちいる傾向がでてくる。小乗教の修行者には、この世界を「無」と感じる傾向が強かったように思うのです。もちろん「空」という概念は知っていたで

しようが、それを「虚無」に近いものとしてうけとっていた。大乘教は、その既成意識を排し、新しい空の概念を確立しようとしておこったのかもしれないね。

ところで、「空」の世界である精神の分野ですが、心理学、精神分析の分野においても、その世界を追究してきた結果、いわゆる時空概念、あるいは、有無の範疇ではとらえきれないことを明らかにしており、仏法の「空」の説明と非常に似かよった解釈をしているのですね。精神分析においては、精神世界における無意識の内奥を指して、「イド」^(注10) または「エス」と称しておりますけれども、そのイドについて、土居健郎氏の『精神分析』によりますと、こうなっています。

「それは、まず組織をまったく欠いている。それは方向がなく、論理を知らない。もちろん、道德以前のものである。したがって、イドのなかの衝動は、てんでんばらばらであるが、それでいて相殺^{ちうさい}することもなく、離反することもない。混沌としているが、矛盾はないのである。なお、イドのなかでは、時間的

経過というものもないと考えられる」

時空概念による明確な位置づけはまったくできないし、混沌そのものである。しかし、それ自体矛盾はまったくなく、という説明です。

—— 道德以前のものというのは……。

—— これは道德的でないということではなく、環境によって道德として形づくられる以前の原初状態であるということです。

池田 なるほど。イドというのは、人間が本来もっている本能的欲望をも含んだ、人間生命に内在するすべての生命的なエネルギーともいったものだろうね。善とか悪とかという、価値判断の枠組みをも超えており、右か左かというような論理的判断以前のものであるわけだ。しかし、そこには強い不断の発動性があり、人間が人間として生きていくための強力なエネルギーがある。人間が生きていくための原始的的精神エネルギーのようなものかもしれない。そして、それは、とうぜん混沌の世界でしょう。しかし、矛盾もなければ相殺もない。混沌ではあるが、そこに生への方向をはらんだ、みごとに調和と統一が

あるということでしょうね。むしろ、融合といったほうがいいかもしれない。そのイドが外界との接触を通して、一個の人間の活動を生みだしていくわけだね。これは「空」以外のなものでもないといえます。

——それから、DNAに含まれる情報なども、「空」といえるのではないのでしょうか。人間は、それこそ、膨大な量の遺伝情報を一個の人格のなかにもっています。これは遺伝子であるDNAの組み合わせを意味するわけですから、でも、五十億ともいわれるこの情報というものは、人間が一生かかっても、とも、使いきれぬわけではない。ほとんどの人はその数分の一だけをを使うにすぎないといわれています。この情報というのは、ユング的にいえば、過去のあらゆる体験、知恵というものが、ぜんぶ入っているわけですね。

——たとえば、人間がヘビなどを一様に嫌い恐れるのも、過去に恐竜類に迫害をうけた古い体験が情報として、すべての人びとに組みこまれているのではないか——というようなことですね。

——その情報というものが、ほとんど使われない。いかなる天才でも、大

脳の三分の二は使われないままで眠っている。出しきれないまま一生を終わってしまふわけです。もし、最大限に情報を使いこなすことができたとしたら、現在の私たちの能力をはるかに超える力が発揮されるでしょうね。

池田 一人の生命のなかに、無限ともいえるほどの可能性をひめているということだね。ただ、人間の性質は、善悪両面をかねそなえているものだから、賢くなるということは、同時に悪賢くなることでもありうる。最大限に情報を使えると仮定しても、それを、どう善の方向へ導いていくかは、大きな問題として残るにちがいないね。これ以上、悪賢く残忍になられたら困る面もでてくる（笑い）。

そういう「情報」自体は、たしかに「空」の存在ですね。それが種々の外界との接触、体験によって、一個の人格のなかにあらわれてくる。それで、「仮」になり、「有無」でとらえられる次元に入ってくるけれども、情報自体、情報が情報として眠っている状態は、顕現への可能性をひめた冥伏の状態だから、「空」ですね。

——少し話は変わりますが、物理学という学問は、徹底して「有無」の世界を追究する学問です。有とも無ともいえないなどというのは、物理学の敗北であるとかえ、従来、考えられてきたわけです。ニュートンを頂点とする古典物理学では、目に見える世界、測定可能な世界の追究を中心として、宇宙のいっさいの原理・法則を明らかにしようとしてきた。ところが、アインシュタイン、ボーアなどにより、場(注1)や光子、あるいは素粒子という究極的——もちろん、これが本当の究極であるかどうかわかりませんが——そういう段階になって、きわめて「空」に近い概念を導入しなければならなくなってきた。ふつうなら「状態」とか「性質」というのは、物質の分布とか媒体(注2)の存在などによって、二次的に明らかにされてきた面もあるのですが、性質や状態を一義的に仮定し、そこから物質の世界へもどって説明しなす、というようなケースがでてきています。

——たとえば「場」の理論などもそうですね。これは光りを運ぶ媒体はなにかを追究してわかったことですが、ふつう、光りとか音などの波が離れた地

点へ到達するには、なにかを媒体として伝達されるはずだ——というのが、定説になっていたわけです。音なら、空気とか水とか金属などを媒体として伝わる。ところが、光りの場合は、種々の厳密な実験の結果、これは、マイケルソン・モーレーの実験^(注12)として有名ですが、光りは真空のなかにも伝わるということが明らかになった。これは当時は驚天動地^{きやうてんどうち}のことだったのですね。真空とはなにもないところなのに、そこを波がどうして伝われるのか、大問題になったわけです。それだけでなく、電波、磁波なども真空中を伝わる。これらをどう説明するか、ということから「場」の理論が生まれた……。

——結局、真空、空間には、それらを伝える性質があるのだということ、まず認めてしまったのですね。そういう空間の状態を「場」と呼んだ。電場、磁場、重力場です。

池田 よく電力線、磁力線というように空間が電氣的、磁氣的な性質を帯びているのを、たとえば、磁力線なら鉄粉であらわしたもののだけでも、空間自体が特殊な状態にあり、そこにおかれた物体は影響をうけざるをえない。それ

を空間自体に、もともとそういう性質があるのだと規定すると、それはとりもなおさず、「場」が空の状態であるということになる。おもしろいのは、そういう状態を物理学などでは、「空間のゆがみ」として表現していることだね。空間自体は、ゆがんでいるのかどうかはわからない。ただ、なにもない真空でありながら、そこにおかれた鉄粉なら鉄粉が、磁場により力をうけざるをえない。そういう力を空間が内包している感じを「ゆがみ」として表現したのだからね。

——重力場の考えを唱えたのは、アインシュタインですけれども、そういう立ち場に立つと、物が落ちるといふことのとらえ方も少しちがってくるんです。ふつうなら、投げ上げた物が落下するのは、地球の引力によって引きつけられて落ちるといふわけですから、重力場の考えですと、重力線の上を移動するわけですね。

——それから、光についても、先ほど光りが波である場合の説明がありました。粒子と波の二つの性質を同時にもっているのですね。こういうこと

は、私たちの常識で考えられないことなんです。現実には、実験の結果は、光りは粒子であると同時に波である、という二つの性質をあわせもっていることを示している。

——少しむずかしくなりますが、光電効果は、光りが粒子であると考えなければ、説明ができないし、光りの干渉作用は、波ととらえられることを要請していますね。

——そうです。そこで「量子^{りょうし}」という考え方が生まれた。ところが、この二つの性質を認めてしまいますと、光りの性質というものは、もう単純な説明では理解できなくなってしまうわけです。運動に相対性をもちこむという画期的な、奇想天外ともいえる理論を打ち立てたアインシュタインでさえ、この量子という考えについては、ボーアなどと論争して、結局は、誤りを認めざるをえないようなこともあったようです。

——光子^{こうし}が波と粒子の両方の性質を同時にもっている、ということをおわかりやすく説明したものとして、朝永振一郎博士の「光子裁判」という随想があ

りますが、あそこでは、光子を犯人に見立てて、家の外からなかへ入るのに、同時に二つの窓を通り抜けるということがありうることを説明しています。もし、どんな犯人でも、そういう特技をもてば、裁判ではやっかいなことになるでしょうが……(笑い)。

ところで、この粒子と波という二つの性質は、光りだけでなく、究極的には、すべての物質がもっているという考えがありますね。

——ド・ブロイはそういつています。つまり、物質波ですね。むしろ、そう考えるほうが自然で合理的ですね。

池田 アインシュタインは、そういった考え方の基礎に立って、統一場の理論を打ち立てようとした。電場と磁場は電磁場として、総合的に把握されていたけれども、重力場の考え方も入れて、全宇宙を一つの統一的な「場」で、説明しようという考えですね。それは、まだ完全にできあがったわけではないけれども、その方向性は正しいように思う。そして、エネルギーが多量に集中しているところが物体となり、少ないところが場になるという考えですね。

そうなると、物質と場は、いままでは異質のものと考えられていたわけだけれども、本来は同一のものが別形態をとって顕現したのが、それぞれ物質であり、場の空間である、ということになる。とすると、こうした空間というものは、やはり、有とも無とも固定できない実在であり、しかも、それには物質を誕生させるあらゆる可能性を含んでいることになる。

——大きくいうと、宇宙生命自体が「空」の状態で存在するというふうにとらえることができるようですね。

それから、物質の究極単位として考えられてきた素粒子の問題ですが、これが「素^{もと}になる粒子」の域を越えて、数百種類も見つけられているわけで、素粒子という名は適当でないとか、基本粒子を捜そう、というような試みが行なわれていきますけれども、この素粒子自体、粒子という概念を離れつつあるんですね。湯川博士は「素領域理論」というのを打ち立てていますが、これは、かんとんにいえば、そういう究極のところは、点や物体という考えだけではつかみきれない、領域を考えなければならぬ、ということだと思えます。湯川博士

はよく「マル」で表現していますが、そういうつかみ方が必要になったことは、非常に興味深いことです。

池田 物質、色形しきぎょうの究極における姿が、空間との関係において、「空」に近

い概念を導きだしているということは不思議なことだね。また、深層心理学の最先端で、「空」に近い表現でものごとを説明しているのはおもしろい。物質の究極とか、心の内奥という、もつとも基本的なところへくると、そういう状態であることを認めざるをえないということですね。いずれにしても、「空」という概念、いわゆる「有」か「無」かでわり切ってしまうという判断形式を打ち破るこの「考え方」は、「あいまいさ」ということではない。たとえば、「空」という概念が「あいまいさ」を意味するものであったとしても、そのあいまいな、混沌としながらも、秩序ある調和を示している状態こそが、世界・宇宙の本質ではないかということに、最先端の科学が気づきはじめたということではないだろうか。

一貫して不変の「我」Ⅱ中Ⅱ

——ところで、このように「仮」という見方、「空」という見方だけでは、まだ、物事の本質をとらえきっていません。そこに「中道」という考え方が導入されてくる所以ゆえんがあります。この「中道」という言葉もまた、これほど誤解されている言葉はないですね。ある場合には、「空」以上にあいまいな概念としてうけとられています。また「中庸ちゆうよう」ということと混同されている場合もありますね。

——『十如是事』には、「如是体とは我が此の身体なり此を法身ほつしん如来にょらいとも又は中道とも法性ほつしょうとも寂滅じやくめつとも云うなり」とあります。ここで「我が身体」とあるのは、色法の肉体という意味ではありませんね。

池田　そう。「仮」と「空」をささえている生命の本体、また、「仮」と「空」を含んだ生命の実在という意味でしょうね。われわれの生命を構成しているものとして、まず「仮」としてとらえられる色彩の世界がある。肉体としての姿、形、色ですね。そして、その生命体のもつ特性、性分は「空」の状態でそなわっている。しかし、それだけで生命の全体像となるかという点、そうではない。「仮」「空」の世界をつくりだす本源としての存在がある。それが「中道」という発想です。したがって、外見の姿、形が変わり、特性、性分は刻々変化する。しかし、そこに一貫して流れる不変の実在がある。それが「中道」ですね。

——人間生命をとって考えてみますと、AならAという人の肉体は、仮和合で、瞬時もとどまることなく新陳代謝をくりかえしている。それは「仮」のところでは話しあつたとおりです。また「空」の世界である性分も、外界の縁にふれて、冥伏から顕現へ、顕現からまた冥伏へと変遷へんせんしますし、また、どんな心の世界、精神の豊かさとして形成されていくこともあります。したがって、「空」もまた動いてやまないものとなる。では、Aという人は、つねに動き、

変化しているから、昨日のAは今日のAではもうないのかということになりま
す。しかし、このように変転をくりかえしながら、しかも、そこに一貫してA
という人間が確立しているのですね。「仮」の世界も「空」の世界も、五歳の
時のAと三十歳、四十歳のAとはまったく別人といってもよい。しかし、だれ
も別人とは思わない。顔立ちが似ているとか、考え方が共通しているとか、記
憶があるとかという表面上の連続性ではなく「空」や「仮」の世界を生み
だし、たえず生を営んでいる不変の実体があると考えざるをえないわけです。

池田 これを、西洋流の言葉で表現すれば、「我」ということにもなるだろ
うね。しかも、生命のもっとも中核となる「我」だね。「本質我」^(注15)という言葉

を使ってもよいと思う。とくに西洋哲学のなかでは、実存哲学が「中」に近い
発想をしているようだ。この世界に出現した自己の「我」というものを追究し、
その根源を探ろうとしていると考えてよい。キルケゴールの「単独者」、ニー
チェの「超人」、ヤス・パースやハイデッガーなどの「本来的自己」という考え
方などは、それに近いね。

——実存主義という哲学の流れは、私たち自身が主体的に生きる道を求めようとしたものだと思います。そのなかで、西洋流の神を認める人たちと、神を否定する人たちがいますが、いずれにしても、人間らしい人生を求め、死とか不安とか絶望とかをのりこえようとする自己変革にたいする努力がうかがえます。

いま会長のあげられたキルケゴールの場合は、最後的にはキリスト教的な神に行きつくのですが、とにかく、ただの一人で、不安とか絶望とかに対決していった。そういう人の生き方を貫く自我を「単独者」といったのでしよう。ニ―チエの場合は、神をまっ正面から否定し、そのかわり、人間が強くなる、つまり、西洋流でいう神にかわる力をもつ、そういう自我を求めて「超人」の思想ができあがってきます。さらに、ヤスパースやハイデッガーも、その哲学はちがうにしても、ともに、死と不安とに対決して生きる自我、それを本来の人間のあり方だとし、「本来的自己」と表現しています。

彼らには、日常の種々のことにとらわれごまかされて、人間としての本来的

自己を忘れてはならない、という主張が一貫してあります。つまり、実存主義の哲学者のなかには、自己の本質的な自我を直視しつつ、それを深めていった努力がありありとうかがえますね。

——「我」というものを見つめることによって、自己の行動の起点、方向性がはっきりすることは考えられますね。唯物論は「仮」の世界を下部構造とし、それを根源としてとらえているし、観念論は「心性」を掘り下げた。しかし、唯物論や観念論などが行動の機縁になることは、「我」にくらべて薄い面もあるのではないでしょうか。たとえば、経済構造については『資本論』の姿勢をとるが、みずからの行動に対する発条ばねとしては、実存哲学をよりどころにしているというような青年も多いようです。

池田　ただ「我」といっても、心理学等という自我意識とは、厳密に言えば、ちがう面もある。心理学という「我」は、意識と切り離せないし、精神活動の一部として、とらえられる。フロイトが、イド、自我、超自我と、精神を分析しているけれども、また、その自我には意識だけではなく、無意識層も含むわ

けだけれど、仏法でいう「我が此の身体」というのは、さらに生命の根源に迫り、生命そのものの、いわば全体像を指していつているのです。たしかに自我意識や、フロイトのいう自我も、他人とは区別するみずからの生命を考えているわけだが、仏法の「中」という考えにおける「我」の場合は、いうならば、「生命的我」ともいうべきもので、あらゆる外的条件を取りさったうえに、なおかつ、残るものであり、宇宙と生命の奥底に根ざした、生命の特性、特質というものがある、という考えです。

——戸田前会長が「我」を説明するのに、夢を見ているとき、その夢をじつと見つめつつ、苦しんだり、喜んだりしている存在があり、それが「我」というものを理解する示唆しきになるんじゃないか、という意味のことをいわれていましたね。ふつう、夢を見ているとき「これは夢だ」という感覚がおこる時がある。これは「今おこっていることは現実であるはずがない」という意識が働いているわけですね。夢を夢として判断しているわけではないでしょうが、夢のなかで動き働いている自分を正確に把握してみるならば、そこに「我」がと

らえられるのではないか、という意味だと思います。非常に興味深い示唆ですね。

池田　ところで、このように、あらゆる存在は、空假中の三諦でとらえることができるわけです。しかし、三諦といっても、それは一つの実在の三つの観点からの認識であって、けっして別個に分離して考えるということではない。中道が空・仮なるものをささえている存在であるといっても、それだけでは、生命の本質をとらえたことにはならない。「中」が、「仮」にあらわれ、「空」として存在し、そして、その三つが、たがいに補いあって、一つの生命の実在をくまなく照らし晴らすのです。中道だけでは「但中の理」といって、仏法でも否定しているところです。つまり、三諦といっても一諦に含まれるし、逆に、一諦といっても三諦によってとらえた実在の一面だということが出来る。これを「円融えんゆうの三諦」といい、『法華経』の極理ごくりであることは周知のとおりです。

—— 私たち人間の生命が、仏界とあらわれたときには、「仮」から見れば、応身如来として、実証の姿を示し、「空」からいえば、報身如来として、仏智

を顕現していくことができる。そして「中」から見れば、法身如来として、その身がそのまま仏なんです。三諦が三身さんじんとあらわれるわけです。

池田 円融の三諦によつて、あらゆる生命的存在を、ありのままに把握することができ。あるいは変化し、あるいは不変であり、あるいは冥伏している生命の諸相を、正しく全体的につかむことによつて、生命を開発し、変革していこうとした仏法の知恵は、深いものだし、一面からの探索にとらわれず、他の面から見直してみるという柔軟性が、やはり、生命とか宇宙という根源的なものを見つめる際には、必要なのではないだろうか。

時間の謎

万物は時を刻む

——時の流れというのは不思議なもので、同じ一年が数十年以上も経過してしまったように思われることもあれば、逆に一瞬のうちに過ぎ去ったように感じられることもあります。そのように「時」というものは、とらえどころのないほど奇妙というか、おもしろい存在ですね。存在とっていいかどうか、わかりませんが……。

——時の多様さということだと思います、ある学者のつぎのような言葉があります。「この世の中にあるものすべてのうちで、もっとも長く、もっとも短いもの、もっとも速くてもっとも遅いもの、もっともこまかく分けられながらも、もっとも長くのばされるもの、それが時間である」

スフィングスの謎みたいな言葉ですが、よく味わってみると、時間のもつ性質を、みごとにあらわしていると思います。ちよつと、ナゾナゾ遊び、みたいですが……。

池田 おもしろい表現だね。時の本質をずばりといいあてている。

たしかに、楽しみの時は一瞬に過ぎ去り、苦悩にあえぐ時間は、なかなかすまない。恋人とのデートの時間などは、この世のなかで、もつとも速く過ぎていく類^{たぐい}ではないかね（笑い）。逆に、病いの苦痛にさいなまれる時間は、無限につづくかと思われるほど長い。時計の針の、のろのろとした動きがうらめしく思われるにちがいない。

——時計の示す時間は同じでも、それを感じる長さは、私たちの生命状態によって、さまざまに変化するわけですね。

池田 長くもなれば、短くもなる。速くもなれば、遅くもなる。同じ時間でありながら、なぜこのように千変万化^{せんべんばんか}に感じられるのか。ここに時間を生命論のうえから考えるポイントがあるといえるね。

——ギリシャの哲学者アリストテレスは「時間とは、万物の運動をはかる基準である」と定義(注16)しています。

たとえば、新幹線ひかり号が、時速二百キロぐらいのスピードで走っている。そうすると、一秒前と一秒後とでは、ひかり号の位置がちがいますね。つまり、ひかり号は運動したわけです。どれぐらい位置をかえたか、つまり、運動したかを、時間単位で知るわけですね。そこで、秒速いくらとか、時速いくらとかいった表現ができるのですね。

また、カントによれば、私たちが、こういう認識ができるのは、人間生命には時間と空間のワクを通して、万物を見る力がそなわっているからだということになります。つまり、時間とか、空間もそうですが、人間生命の意識に、もともとそなわった心のものであると——。

池田 そのような人間の能力が、時間の感覚をもたらし、また、時計のあらわす「時刻」をつくり出したといえよう。このような「時刻」は、天体の運行、あるいは振り子などといった規則的な運動体によって、人間がつくり出した、

いわば時間の「ものさし」であるわけだ。

むろん「時刻」は、社会生活を営むにあたっては、きわめて便利で貴重な代物だしろと思う。その実用価値は、はかりしれないほど大きい。しかし、時間のすべてを考察しようという場合には、「時刻」としてあらわされる時間の奥に、私たち自身の生命が感じている、時間のさまざまな姿をみることが要求されるでしょう。

——それと、時間の考察にあたっては、とうぜん、空間のことも念頭におかねばなりませんね。

池田 そう。私たちは、時間とか空間とかを、実在するものとして考えがちだが、実在しているのは、運動し変化している宇宙、物体、生命である。その宇宙の運動、物体の変化、生命の生成流転を認識する枠組みが時間であり、空間なのです。つまり、この両方のからみあわせによって運動や変化を知るのですから、もともと、時間と空間は、ともにからみあい、融合していると考えられる。空間を排除した時間も、時間のない世界も観念のうえではありえても、

実在の世界ではありえないと思われる。

——さて、ものの順序として、まず、時計のなりたちから考えてみたいと思います。時計が示すのは「時刻」ですが、この「時刻」は、どのようにしてつくりだされたかということですね。

現在まで、時計の原型であり、基準としての役割りを果たしてきたのは、いうまでもなく、天体の運行です。私たちの使っている一年という単位は、地球が太陽をめぐる公転を意味していますし、一日は、地球の自転を単位にしています。その一日を、二十四時間のリズムに区分し、細分して、時間、分、秒の単位をつくりだしましたが、これらの「時刻」は、すべて、天体の周期的な運動から割りだされたものです。

ところが、一九五〇年ごろからは、量子論という学問に基礎をおく原子時計(注17)が脚光きやうこうをあびています。おもに、秒以下の時間の測定に使われるのですが、高精度の原子時計が発明されています。セシウムという原子の固有振動、つまり、規則正しい運動を利用して、一秒間をきわめて正確に決めることができるよう

になったとされています。

——すると、地球の自転を基準として割りだした「一秒」と、原子時計の刻む「一秒」とのあいだに、食いちがいはないのですか。

——ごくわずかですが、ギャップが生じています。いままでは、地球の自転を単位にした一日を、八万六千四百分の一に区切って、それを「一秒」と決めていたのですが、原子時計での「一秒」とくらべると、ほんの少しだけ長くなっているのです。

その原因は、地球の自転速度が遅れてきたことにあります。具体的な数字をあげれば、一九五八年から七一年末までの十四年間で十秒、一年に直すと、〇・七秒だけ、地球の自転が遅れてきているのです。

——最近は、原子時計が基準ですね。そうすると、一年間に〇・七秒だけ足さないと地球の運動で測った「一年」にはならない——。

——ええ、そういうわけです。そこでこの二つの「時刻」を調整するため考えたされたのが、「うるう秒」で、一九七二年から二回ほど実施されてい

ます。

一回目は一九七二年の七月一日で、午前八時五十九分五十九秒のつぎに、五十九分六十秒がくるのです。そのつぎに六十分、つまり、午前九時〇分〇秒となるのです。「一秒」だけ、人工的にくわえて、原子時計の「時刻」と、天体の運動を基準にした「時刻」を調整するというわけです。「うるう秒」がくわえると、なんだか、「一秒」だけ得をしたような、といっても、変わりがないような……(笑い)。

池田　ずいぶん、精密な話だね。原子時計の開発によって、こんごもますます、天体をはじめとする万物の運動が、正確に測られるようになるだろうね。

——ところで、私たちが、時刻を具体的に知るのは時計です。その時計は、振り子や原子の周期的な振動を基準にしてつくられていることになりましたが、時計というのは、文字盤のうえを、長短各種の針が動いているだけですね。

物理的に考えると、四角や丸の空間を、長針と短針が、それぞれの運動をくりかえしているのが時計です。一定空間を一定速度で動いているというこの運

動の規則性から、時間の経過を規則的に知ることができるようになっているわけです。

このようにつきつめてみると、時計の示す「時刻」と、時間そのものとは、まったく別のもののように思えてきます。

池田 「時刻」というのは、物理的、客観的な時間を指し示すものといいなおしてもよいでしょう。その「時刻」を具体的に示す道具が、時計だが、時計の生いたちからもわかるように、時間とか、分とか、秒とかいった物理的な時間の単位は、天体や原子の規則正しい運動を観察して、そこから、人間の英知が考えだしたものだね。

では、どのようにして、人間の頭脳が、太陽や地球や原子の運動から、人工的な「時刻」を考えだしたかというと、一口でいうと、だれにでも見える自然現象のなかで、もっとも規則正しく時を刻む天体の動きを、振り子と歯車による空間運動にうつしかえたのだね。

——そうですね。たとえば、いまでも、よく公園や学校の校庭などに日時^{ひど}

計があります。中央に一本の棒をたてておくと、その影が、西から東へと動いていく。影の動きによって「時刻」を知ることができるわけです。

この、日時計と地球の自転の關係は、日時計の棒の影の動きは、地球の自転速度をそのまま反映しているわけで、つまり、地球がその回転によって示している時の歩みを、一本の棒の影の動きという運動にうつしとったのが、日時計の原理と考えられます。

現在、私たちの使っている時計も、原理的には同じことなわけです。原子の運動を、腕時計や柱時計などの、秒針や長短の針の動きで示し、一定空間内の運動としてあらわしているのですから。

池田　だから、時計を穴のあくほど見つめても、そこには時間そのものは存在しない。ただ、時計の文字盤というのは、空間を固定化することによって、そこに運動する針の位置が、一目瞭然に時間の経過を示すようにしたものといえるでしょう。

——しかし、このように天体などの物質の規則的運動によってとらえた時

間は、客観的な「ものさし」にはなりうるにしても、けっして、それが時間の本質をとらえたものではないと思えるのですが――。

池田 物理的な時間は、天体や原子などの無生の存在がおりなす機械的運動の規則性によってとらえたものだ。したがって、天体の運動を基準にしようと、原子のリズムを基準にしようと、そこにとらえられる時間体系は、そのまま空間化して認識することができる。

こうした太陽や地球や原子、素粒子などの運動によってとらえられた時間は、ふつう「物理的時間」と呼ばれるが、それは、客観化された時間概念といえます。

つまり、これらの天体運動の規則性は、少なくとも地球上に生存しているあらゆる人びとにとって、等しく観察されうるものであり、また原子や素粒子の運動の規則性は、どこで観察しても同じ結果を示すがゆえに、時間の経過をみるための客観的な「ものさし」になりうるのです。

こういった客観的な運動とちがって、生命体の内には、それ自体の独自の変

化がたえまなく行なわれている。肉体上の生理的変化は、外界の影響に左右されやすいから、生命の生成以来くりかえされてきた四季の変化に対応し、それと同じリズムで変化をくりかえしている面がある。

私たちの生命も、太陽系の一員である地球の上に生息している以上、その生命活動の大きな部分が、大自然の律動にのつとつて営まれていることは、とうぜんである。人間生命は、宇宙万物の動きに適應し、そのリズムをとりいれているのだからね。

ちようど、大海に生きる魚が、塩水をはなれて生きられず、体液の成分に種類の塩類をとりこんでいるようなものだ。だが、魚の体液は、海の水とまったく同じではない。各種の塩類を吸収しつつも、それを自分なりにつくりかえて、その魚独自の体液を形成している。

これと同じように、人間生命も、自然のリズムにひたり、その荒波にもまれながらも、生命独自の流れをきずいているのです。

——そうしますと、生命の刻む変化のリズム性には、客観的時間と対応す

るところもあるのですね。

生命的時間について

——大自然のリズムに適應した生命の流れを、學者たちは、バイオリズムと名づけています。また、時計という言葉を使うと、体内時計ということになります。私たちの生命を含めて、この大宇宙には、じつにさまざまなリズムが脈うっています。小さなリズムですと、動物の心臓のうつつ搏動はくどうですね。大きなリズムでは、地球の自転と公転なども、地球という一つの生命体のリズムですね。四季の変化が、これによってもたらされるのですが、その季節の移りかわりに相應して、動物が冬眠し、渡り鳥が移動したりします。人間にも、一日とか、一か月とか、また、季節ごとのリズムが、ちゃんとそなわっています。たとえば、睡眠と覚醒かくせいのリズムは、二十四時間単位ですね。これは地球の自転に

適応した身体の律動と考えられます。

——しかし、生まれてすぐの赤ちゃんの睡眠には、昼と夜の区別などがありませんね。お乳をのんでは眠っている。よく「寝る子は育つ」といいますけれども……（笑い）。

——生まれたての赤ん坊は、一日に七回ぐらい眠ったり、目覚めたりするといわれています。生後四か月ぐらいになって、耳も聞こえるようになり、明と暗を感じるようになると、ようやく、少しの昼寝と、一回の夜間睡眠の型になります。そして、成人と同じ睡眠のパターンは、十歳をすぎてから確立するとされていますね。もともと、成人でも、三食と昼寝つきというパターンを示す女性もいるにはいますが（笑い）。まあ、一般的には、太陽の輝きとともに目覚め、淡い月光にてらされて憩うというのが、古来、理想とされてきた人間の一日のリズムですね。

また、ミュンヘン大学のテオドル・ヘルブルグ博士の報告によると、赤ん坊の心臓のリズム、つまり、搏動数の変化も、母親の心搏数の変化とはちがうよ

うです。母親の心搏数は、昼間多くなり、夜には少くなりますが、赤ん坊の心臓は、二十四時間中、ずっと同じリズムで搏動しています。ところが、三か月ぐらいたつと、赤ん坊の心臓のリズムも、昼と夜の区別ができてきます。昼に多く、夜には少ないというリズムですね。

このほかに、体温の変化、腎臓の機能、ホルモンの分泌なども、成人では、地球の自転に合わせて、昼は活動的になり、夜間は低調になりますが、このような変動があらわれてくるのも、ほぼ一歳から四、五歳にかけてであるとレポートされています。

——バイオリズムには、季節によって変化する律動もあると聞いています
が——。

——地球の公転、四季の変化に対応した年周期性のリズムですね。おおまかにいえば、心搏数、体温、血圧、ホルモンの分泌などは、ほとんど、二十四時間の変動を示すとともに、季節によっても変化していくと思われます。

具体例をあげれば、心臓の搏動も、夏には最大の脈搏数を示し、冬には最低

になるという律動をもっています。体温なども同じですが、おもしろいのは、毛髪の伸び方にもリズムがあるという事実ですね。ヒゲの伸び方を研究した学者によると、冬の一月には一日で〇・三〇五ミリしか伸びないが、夏の八月には一日で〇・五三八ミリも成長すると報告されています。しかも、これらの季節的変化も、日周期性の変動と同じく、赤ん坊には存在せず、しだいに体得されていくものようです。

池田 人間の身体は、じつに巧妙に、自然界のリズムに対応し、その流れをとりいれているものだね。生命は、自然界の海にひたり、宇宙の変転とともに律動している。

しかし、私たちの身体には、大自然との関係だけでは追跡しきれない動きも少なくない。卑近な例をあげれば、頭髮が白くなっていくとか、皮膚の光沢が失われていくとか、体液の成分が変わっていくとか、また、動脈壁が硬化するとかいった類の変化には、天体との対応はまず見られない。

——医学的にも、夏には白髪であったのが、冬には黒変するとか、春風が

吹きだすと、禿頭に自然に髪が生えてくる、なんてことはありませんからね。
「養毛剤」でもつけければ、別でしょうが（笑い）、それも一時的な効果にすぎないでしょう。また、バイオリズムとしてとりあげた時間変化も、長い眼で見れば、やはり、少しずつ微妙に移りかわっているようです。

血圧なども、昼と夜、季節ごとのリズムをくりかえしながらも、青年期から老年期に向かうにつれて上昇していきます。心臓の搏動数と呼吸の数は、子供では比較的速く、大人ではゆったりしてきます。また、体温は、子供では高く、大人では少し低下するのがふつうです。こうして見てきますと、人間の身体は、外界のリズムをとりいれつつも、独自の変化を見せているように思われます。

池田 身体には、外界のリズムに対応するものだけではない、それ自体に特有の流れがあり、運動があると考えざるをえないね。

つまり、心臓の搏動などのバイオリズムから、血管壁や皮膚や体液などの変化を含めて、まことに、多彩な臓器や細胞に脈うつエネルギーの流れが重なりあい、統合し、一体となって、一人の人間身体の潮流を形成しているわけだ。

このような身体各部分の多様な運動を、融合させ、統一し、一個の生命体に集結させる、人間身体独自の流れというものは、認めざるをえない。これを身体流と呼ぶことにすると、人間の肉体は、細かくみれば、外界のリズムに応じたバイオリズムをかなでながら、大きくみると、この身体流の動きにつれて、変化し、変転していくわけです。

むろん、一人の人間が、この世に生をうけてから、成長し、活動し、やがて、老境にいたるまでの身体的変化の速度は、一様ではないでしょう。また、それは各人によってもことなってくると思われる。しかし、おおまかにいうと、身体流の速度は、少年期には非常に速く、青年期には少しゆるやかになり、壮年期から老年期にかけては、いっそうゆるいテンポで流れていく、ということはいえるでしょう。

——生理学者たちは、身体流の速度を「生理的時間」という単位で測定しようとしています。たとえば、アレキシス・カレルは、私たちの身体の変化を知るための時間を「生理的時間」と名づけ、ある程度、具体的な提案をしてい

ます。生理的時間というのは、人間の身体の全体的な変化をうまくキャッチできればよいのですが、それを体液に求めています。人間の体液は、つねに新陳代謝して入れかわっていますが、それでも、しだいに、その成分に老化の兆しきざしがあらわれてきます。その兆しをうまくとらえるということです。

もう一つは、これはみな経験があると思うのですが、手や足をすりむいたり、切ったりしますと、そのあとで、しだいに肉がもりあがってきますね。肉芽にくがというのですが、そのもりあがり方、そして疫痕えきこんができて治っていく速度が、子供ほど早い。老人になると、容易に治らない。この治り方が、身体流の速度の変化を、だいたい、あらわしているようですね。

——そうしますと、ちょっと、もとにもどりまして、たとえば、少年時代の「一年」は、身体のリズムでいえば、成人の「十年」にも相当するといえるわけですね。

——身体細胞の分裂速度とか新陳代謝も、幼年期や少年期では、おどろくほど活発ですからね。老年になると、身体の活力はずいぶんおとろえてくる。

池田 もう一步、この生命的時間という問題について深く考えてみよう。人間生命は、肉体的存在であるとともに、精神的・心理的存在でもある。つまり、色心不二の当体です。

たとえば、一口でいえば、精神的に充実した生を送っている人の生命は、同じ一年でも、その一年を内容豊かなものとして感じるだろうし、逆に、心が空虚な人の体験する時間は、たとえ、若者であっても、非常に短い、内容のほとんど存在しないものになると考えられる。

そこで、私は、客観的な「物理的時間」や、身体のリズムを知るための「生理的時間」とは別に、「精神的時間」もしくは「心理的時間」の概念を考える必要があると思う。つまり、人間の生命は、生理的時間と精神的時間とに生きるものであり、私はこれらを総合して「生命的時間」と呼ぶことができると思うのです。

もちろん、この精神的時間は、アレキシス・カレルがやった、体液や肉芽の量りあがりなどというような客観的に測定する手がかりはないから、あくまで

も、当人の内省による分析以外にないわけだ。しかし、人間存在にとって、肉体上の問題より、はるかに重要なものが、精神的な充実度だと思う。

——ドイツの文豪ゲーテの日記に、興味深い文章があります。「私はもつと注意して、私自身の体内におこる好い日と悪い日を区別しなければならぬ」と思います。情操も愛情も、欲望や礼節、創造力、行動力、真実さや、楽しさ、スタミナや疲れ、がん固さや柔和さなど、どれもみんな、ぐるぐると軌道を描いてまわっているようです」と記されています。

池田 私たちの心の脈動である人間精神の潮流の動きを、みごとに見ぬいているようだね。ゲーテがいうように、外界の変化とは別に、生命の力がみなぎるような日もあれば、心の疲れに悩まされる時もある。ただ、なんとなく調子が悪い、気分がはれない」といった体験は、だれでももっているものだ。スランプにおちいるのも、こういう時だろうね。

ところが、何日かすると、深い霧がはれたようにさわやかな感情がこみあげてくる。人によって、その周期はちがっても、やはり、生命自体のおりなす脈

動は、けつして否定できないように思うね。

——身体流の大きなうねりについては、先ほど人間の一生を例にあげて、説明がありましたが、身体流の小さな脈動に関しても、一つの説が確立されつつあります。それは、身体の働きをも含めて、心の脈動についての学説で、P S Iリズム(注18)といわれています。Pは、フィジカルの頭文字で、肉体です。Sは、センシティブのSで、感受性、Iはインテレクチュアルを示し、知性です。

人間生命には、この三つのうねりがそなわっている。肉体のうねりは、身体に力が充満してくるリズムですが、約二十三日ごとにくりかえされる。感受性というのは、感情の高まりとか、外界への反応が敏感になることです。その周期は二十八日。知性、つまり、記憶力とか推理力ですが、それは三十三日ごと、するどくなる。まあ、こういった説です。まだ一般には認められていないようですし、周期をくりかえす日数も、これほどはつきりとは決められませんが、心身ともに、ある程度の波のようなりがあるということは、示されているのではないかと思います。

池田 身体流の流れの速い時は、うねりの頂点だね。また、精神のリズム的な力強さ、つまり、精神流といいかえられるが、その流れの強弱によって、感情や知性まで影響されるのだね。むろん、これらが身体流や精神流のすべてではないだろうが、生命の脈動の一端を示すものといえる。だが、注意しなければならぬのは、私たちの心の奥からわきあがる生命の流れは、瞬時もとどまらず、外界との接触のなかで、多様な体験をおりなすという点だと思う。

たとえば、どのように気分が高揚こうようしていても、悲しい出来事に出会えば、感情もしぼんでしまいかもしれない。逆に、楽しい体験は、生命の流れを速める効果があるでしょう。このように考えれば、私たちの生命流は、その潮流の強さとともに、いかなる体験をするかによって、大きく影響をうけるにちがいない。また、私たちの体験が、すべて生の内奥へと沈潜し、生命流そのものとなつて、わきあがつてくるとも考えられる。

したがって、いかなる体験をし、それを自己の体内に吸収していくかによつて、生命の流れの速度は、かぎりなく変化していくでしょう。生命の内容を充

実させる体験もあれば、逆に、生命の力をうばい去っていくものもある。

——この点に関してですが、心理学では、いちおう法則みたいなものがかびあがっています。かんたんにいうと、希望をもち、活発に楽しく過ごした時間、心をすっかり傾けてしまえるような出来事でつまった時間は充実している。つまり、能動的、主体的に外界に働きかけ、創造的に過ごした時間ですね。逆に、単調で退屈な時間や、絶望と不安にさいなまれる時間、苦痛や苦悩から逃れるすべもない時間は、まったく空虚であるというのです。いいかえれば、環境からの圧迫におしつぶされそうになって、そこから、逃れたいと念じたり、ただ消極的に過ごす時間には、生きていることへの満足感などは少しも生じてこない。

——たしかに、私自身も感じることでありますが、仕事にうちこんだ時などは、たとえば疲労感があったとしても、それは快いもので、生命の充実感がふつふつとわきおこってきますね。ところが、無為に過ごした時間のあとでは、どうしようもない嫌悪の念におそわれてしまいます。

しかし、ちよつと氣にかかるのですが、楽しく活発に過ごしている、その瞬間は飛ぶように去っていきます。逆に、退屈な時間は、ものすごく長い。時計の針の動きばかりが、氣になつてしかたがない。とすると、楽しい時の精神的時間は短く、苦しみの精神的時間は長い、といえるように思いますが――。

池田 いや、少しちがうようだね。ここが、時間の複雑怪奇な謎をとくポイントだから、具体的に考えてみよう。

いま、仕事の話がでたから、それを事例にしてみると、よく人は「仕事がおもしろいので、時間のたつのを忘れていた」という。その時の生命状態を考えると、ただ、ぼんやり過ごす場合の、何十倍にも相当する生命活動をし、生命のエネルギーを噴出させている。わかりやすくいうと、仕事をしている「一時間」も、無為に過ごしている一時間も、物理的時間で測ると、同じ一時間の経過しか示さない。仕事に熱中していると、時計の針が十時間も進んでいたなどということはある。ところが、この同じ「一時間」を、その充実度を加味した精神的時間で測ると、前者では「数十時間」にもなろうし、後者では、

ただの「数分」かもしれない。

さて、このように充実した生命流は、能動的、積極的に外界へと働きかけるために、同じ一時間という物理的時間であっても、生命に感じる長さは、相対的に短縮されるでしょう。逆に、精神活動のほとんど営まれていない状態では、生命は空虚であり、消極的、受動的であるがゆえに、相対的に物理的時間に対する感じ方は長くなると考えられる。

私たちの心が、楽しい時間は、瞬時に過ぎていくように感じ、苦悩の時間は長く感ずるのは、以上のような生命流の働きにもとづいている。したがって、もし楽しいことであっても、それをただ待つだけという受動的な姿勢にあると、かえって、物理的時間は長く感じられるし、苦しいことに直面していても、それをただ受けてくるのでなく、こちらから主体的に挑戦していく強い意志のある場合は、物理的時間は短く感じられると考えられる。つまり、能動、受動ということが精神的時間の大きな要素であることを示しているわけです。

——苦しみの極限においては、現実にはほんのわずかな時間が

「数十年」にも、それ以上にも、引きのばされて感じられることがあるのですね。生の能動性がまったく失われ、生命の流れがとどこおると、そこに感ずる物理的時間は、かぎりなくのびていくように思われます。

絶望の極限にいたると、時間は停止してしまったような感じをいただくとの報告が、多くの医師からだされています。抑うつ症のある患者が、医師が五分間だけ診療を待たすと、「六か月も待たされた」と確信していたというのです。長く感じたというより、彼自身は、現実に「六か月」も待ったと信じているのですね。だれがなんといおうと、五分間ではなく「六か月」だと――。また、他の患者は「私の母は、苦悩と拷問ごうもんのうちに二千年生きねばならない」と宣言したとのレポートもあります。これも、譬喩的にいったものではありません。

さらに、麻薬は、人間の身体のみならず人格のすべてを破壊しさるものですが、メスカリンという麻薬をのんだ人の体験によると、「時計を見ると、秒針はその動きが眼に見えないほどの、カタツムリのような速度ではっている」「一夜が、いかなる人間の体験の限界をも、はるかにこえる長さであった」と記し

ています。

池田 まさに「地獄」だね。生命内奥の力が失われ、生命流がとどこおることとは、地獄の責め苦以外のなにものでもないようだね。

現実の人生を見ると、物理的年齢では老境に入っているけれども、本源的な生命流の旺盛おうせいな人は、心身ともに若々しいね。身体もはつらつとし、精神的に測った寿命ものびているだろうね。逆に青年であっても、生理的、精神的な時間がともに短縮している人も多い。私はいいたいのだが、人間の年齢を物理的時間で知ることも大事だし有用だが、こうした内容の充実度から測る視点にも眼を開くべきでしようね。

瞬間と永遠

——これまでのところで、私たちの生命にとって、もっている時間の不思議な性質が、だいぶわかりかけてきたようです。だが、もう一点、時間の謎のうちでも、もっとも根本的な課題、つまり、過去、現在、未来ということについて、おうかがいしたいと思います。

古来、多くの哲人は、万物が時の経過とともに転変していく様を、川の流れるにたとえています。西洋では、ギリシャの哲学者ヘラクレイトスが「万物は流転する」との名言を残していますし、東洋仏法でいう「輪廻（りんね）（サムサーラ）」という言葉も、川の流れを表現したものだとされています。

池田　うむ。よく「時が流れる」というけれども、いまのヘラクレイトスの

動は、けっして否定できないように思うね。

——身体流の大きなうねりについては、先ほど人間の一生を例にあげて、説明がありました。が、身体流の小さな脈動に關しても、一つの説が確立されつつあります。それは、身体の働きをも含めて、心の脈動についての学説で、P S Iリズム(注18)といわれています。Pは、フィジカルの頭文字で、肉体です。Sは、センチタイプのSで、感受性、Iはインテレクチュアルを示し、知性です。

人間生命には、この三つのうねりがそなわっている。肉体のうねりは、身体に力が充満してくるリズムですが、約二十三日ごとにくりかえされる。感受性というのは、感情の高まりとか、外界への反応が敏感になることですね。その周期は二十八日。知性、つまり、記憶力とか推理力ですが、それは三十三日ごと、するどくなる。まあ、こういった説です。まだ一般には認められていないようですし、周期をくりかえす日数も、これほどはつきりとは決められません。だが、心身ともに、ある程度の波のようなうねりがあるということは、示されているのではないかと思えます。

池田 身体流の流れの速い時は、うねりの頂点だね。また、精神のリズミ的な力強さ、つまり、精神流といいかえられるが、その流れの強弱によって、感情や知性まで影響されるのだね。むろん、これらが身体流や精神流のすべてではないだろうが、生命の脈動の一端を示すものといえる。だが、注意しなければならぬのは、私たちの心の奥からわきあがる生命の流れは、瞬時もとどまらず、外界との接触のなかで、多様な体験をおりなすという点だと思う。

たとえば、どのように気分が高揚こうようしていても、悲しい出来事に出会えば、感情もしぼんでしまいかもしれない。逆に、楽しい体験は、生命の流れを速める効果があるでしょう。このように考えれば、私たちの生命流は、その潮流の強さとともに、いかなる体験をするかによって、大きく影響をうけるにちがいない。また、私たちの体験が、すべて生の内奥へと沈潜し、生命流そのものとなつて、わきあがってくるとも考えられる。

したがって、いかなる体験をし、それを自己の体内に吸収していくかによつて、生命の流れの速度は、かぎりなく変化していくでしょう。生命の内容を充

言葉が意味しているのは、流転するのは「万物」ということです。「輪廻」という場合も同じです。最初に話し合ったように、実在するのは、宇宙、物体、生命です。そのいっさいが運動し、変化し、流転している。この運動、変化、流転を認識する枠組みが時間、空間です。だから「流れて」いるのは、万物なのだけれども、視点を考えると、時間が流れていくように思えるわけです。

——ところで、こうした万物の流転によって感ずる時間の経過から、過去、現在、未来という概念が出てくるわけですが、これを、川の流れにたとえますと、未来は絶え間なく現在に流れこみ、その現在は瞬時にして過去になっていきます。しかし、過去は「かつてあった」のであり、未来は「未だない」ものであって、実在するのは「現在」の一瞬しかないということです。

池田 うむ。私たちの生命の実在は、この瞬間にしかない。私たちは、まぎれもなく、現在の瞬間に、苦と楽を実感し、幸と不幸とを感じつつ生を営むわけです。

——「現在」という一瞬は、幾何学でいう「点」みたいなものとして考え

られています——。

池田 幾何学の「点」は、位置だけあって、その内容がないという事実をあらわしているのだね。

——そうです。大きさ、重さ等は認めていません。

池田 「現在」という瞬間をそのように考えることは大きい錯覚です。そこには、じつに豊かな内容が含まれている。私たちの生命のこの現在の一瞬の实在を考えてみても、そこにじつは、過去のすべての記憶が包含ほうがんされているのです。肉体的な記憶もあれば、精神的なものも、しっかりと刻みつけられているにちがいない。

また、未来への希望、期待、欲望、活動性なども、現在の瞬間の生命にそなわっているね。さらに、私たちの身体自身のもつ各種の生物学的な情報も、未来を先取りした肉体の知恵といえるでしょう。

——生物学的な情報というと、DNAに含まれているのでしようが、たとえば、鼻の形をどのようにしようとか、皮膚の色が白いか黒いかとか、また、

極端に言えば、指は何本にしよう(笑い)とかいったことですね。手足の指は五本ずつでないと困りますが、鼻の高さなどは、個人によって多少の差はあります。まあ、こういったことが、DNAに含まれています。

ところで、「現在」ということに帰りますが、哲学者の波多野精一氏は、『時と永遠』という著書のなかで、「現在は、けっして単純な点に等しきものではない。一定の延長を有し、一定の内部的構造をそなえている」といっています——。

池田　まだまだ浅いけれども、方向性は正しいといえる。まさしく、一瞬には「内部的構造」がそなわっていると考えてよかろう。むろん、構造といっても、空間的なものではないがね。

——そこで、まず、現在に包含された過去の内容ですが、一言でいうと、私たちの体験はすべて、どのようにささいな出来事でも、記憶としてとどめられているといえます。

身体の経験は、それぞれの細胞や臓器に刻印されていますが、興味深いのは、

精神的な体験です。私たちが、すっかり忘れてしまっているようなこと、たとえば、赤ん坊のころ、オネシヨをしてしかられたとか、となりの子供をいじめたとか、もつと古いのになると、産湯うぶゆをつかったことまで、ちゃんとしためられているといわれます。その場所を大脳生理学的にいうと、側頭葉そくとうようと古い皮質の海馬かいばという領域(注19)になります。

側頭葉には、言葉や、学校で学んだ知識や、考えたことなどがとどめられ、海馬領域には、喜びとか、恐怖とか、悲しみとかいった情動的な体験がすべて記憶されています。それはちょうど、吸いとり紙にインクがべつとりとしみこんだようで、この吸いとり紙を「記憶の貯蔵庫」と呼んでいます。

——よく聞くことですが、人間が死をむかえる時には、過去の記憶が、ちょうど走馬灯のように、すべてよみがえってくるといいます。しかも、それが、一瞬にです。

池田 死に直面して「記憶の貯蔵庫」のカギが、一度に開いたわけだ。現在の一瞬に含まれる過去の内容が、すべて、意識の表面にうかびあがったのでし

ようね。

——「身体と心」の章でも、少しふれましたが、私たちの個人的な体験の、もう一段奥には、人類としての百万年にもわたる体験が刻まれています。原始人類が、猛獣と戦ったこととか、火を発見した喜びとかいった体験が、現実には、私たちのいまの生命に息づいています。さらに、その奥には、哺乳類ほにゅうとしての経験とか、アメーバとしての経験なども、私たちの生命体としての全体験の内容をしめているかもしれません。

哺乳類としての経験などは、ある程度、想像できますが、アメーバとしての経験というと、ちょっと、私たちの思考をこえているようですが、考えられないこともあります。たとえば、アメーバは、栄養分が流れてきたり、浮かんでいたりすると、それを感じて、すうつと寄っていきます。そして、とりこんでしまう。食欲の原型みたいなものですね。私たちも、家に入ったとたん、よいにおいをかぐと、たちまち空腹を感じる。そして、つまみ食いしたくなることもある（笑い）。

池田 ゆかいな実例だね。さて、そうすると、現在の瞬間には、少なくとも、地球の歴史をすべて包んでいることになるね。瞬間の生を、深く思索すればするほど、その内容は豊かになり、過去へとかぎりなくのびていくと考えられよう。

——こんどは、未来についてですが、これは「空」のところでも話にできましたが、身体的なところからいっても、私たちの身体には、生物学的にいつて、五十億もの情報が内容としてつまっています。つまり、私たちの身体には、無限といっても過言でないほどの、未来への可能性をそなえているといえるわけです。

池田 瞬時の生命に、無限の未来をはらんでいるということだね。

——そうです。その未来を、現在の生が切り開いていくと考えられます。

そこで、有名な話ですが「パスツールの奇跡」というのがあります。彼の偉業は世界中に知れわたっていますが、その大部分が、脳卒中のあとでつくられたものであるという事実は、意外と知られていません。彼が脳卒中で倒れたのは

四十六歳の時です。もう絶望的だということで、フランス政府は、彼のために研究所を建設中だったのですが、それを中止しました。その報告を聞くと、パスツールの症状は、さらに悪化したのです。ところが、彼の友人が、政府に働きかけて工事を再開させると、その症状はしだいによくなり、その後、二十七年間、新しい研究所で人類のために尽くしました。この間の業績は、彼の生涯のうちでも、もっとも輝かしいものだったそうです。

池田 うむ、おもしろい話だ。奇跡と呼ぶにふさわしい生命の力だね。それにしても、将来にかけた希望や、人類から苦悩をとりのぞきたいという目標への情熱が、まさしく、医学的な不可能をも可能にした一つの例でしょうね。

———そうしますと、希望、期待、未来への情熱などは、人間生命に含まれる未来をひきよせる力と考えられますね。

池田 希望の精神の躍動、未来を信じ行動する情熱などは、人間生命にとって、未来への原動力といえます。だからこそ、希望と目標を失い、絶望の底に沈む人は、みずからの生をとざすことにも等しいのではなからうか——。

——ウィーン大学の神経科の教授でもあり、ユダヤ人としてアウシュビッツ収容所に入れられ、死線を越えてきた、フランクフル博士は、その体験を託して有名な『夜と霧』という本を書いています。そのなかに、つぎのように記されています。

「彼自身の未来を信ずることができなかった人間は、収容所で滅亡していった。未来を失うとともに、彼はそのよりどころを失い、内的に崩壊し、身体的にも心理的にも転落したのであった」とあります。

池田 博士が生きのびることができたのも、未来にかけた信念の賜物たまものだろうね。希望、夢、使命、信念などは、未来を開く力であり、内的な支柱であり、力強い生命流の内容だと思う。

私たちの生命流は、現在の瞬間に生きながら、過去のすべての体験を含み、それを基盤としながらも、無限の可能性をはらんだ未来を切り開いていく。具體的にいえば、過去のあらゆる記憶を再現し、回想させつつ、未来への希望あふれる目標に向かって出立していくのが、現在の瞬間の生というわけだ。

したがって、過去の生も、そのすべてが現在の内容となり、未来のかぎりなく開かれた人生の基盤もまた、いまのこの一瞬に集約されている。つまり、過去、未来と切り離された現在は、現実には存在しないし、現在の生に包含されない過去もなければ、未来もありえない。

日蓮大聖人の『御義口伝』には「已いとは過去なり来きとは未来なり已来いらいの言の中に現在には有るなり」とある。現在の生と、過去、未来の生の本源的なあり方を考えさせてくれる至言しげんです。

——過去といい、未来というも、その本源をたずねれば、現在と一体である。しかも、その現在の生に含まれる過去と未来は、私たちの生命を、その内奥まで深くたどればたどるほど、かぎりなく広がっていくのですね。

池田 生命は、生の表層から内奥にと深まるにつれて、その水かさを増し、内容を豊かにし、巨大な潮流となっていく。私たちの生の瞬間に噴出する生命流の源は、人類の生を含み、地球の歴史をのみこむ、大宇宙の悠久ゆうきゅうたる変転をも包みこんで、宇宙生命の本流に流れこんでいるといえます。この宇宙生命の

本流が噴出し、個別化したのが、われわれの生命であると考えられます。「妙法」とは、この宇宙生命を説ききわめ、あらわしたものであるわけです。

したがって「妙法」は、過去永劫えいこくの生と、未来永遠えいじうの生をはらんでいる。そこでは、もはや、現在、過去、未来などという現象的時間における立てわけは通用しない。過去も、未来も、現在の瞬間と融合し、一体となる。一瞬といえば、瞬間の生とも表現できる。だが、永劫といえば、永遠常住の潮流とも考えられる。つまり、瞬間でもあり、同時に永遠でもある。

——日蓮大聖人は『三世諸仏総勘文教相廢立』に「過去と未来と現在とは三なりと雖いへども一念の心中の理なれば無分別なり」と記されています。このなかの「一念の心中」というのは、私たちの生命の奥底であり、同時に、宇宙生命そのものとしての「妙法」と解してよいでしょうか。

池田 「妙法」それ自体である、生命の本源の実体を説いた文です。宇宙生命においては、現在、過去、未来といえども、一体となって、まったく無分別である。分別することができない。それでいて、「一念の心中の理」とあるよ

うに、その永遠即瞬間の生命が、差別となつて具体的な活動を営んでいく。つまり、本質的には無分別でありながら、過去、現在、未来へと分かれていく差別相をもちらんでいるのだといえよう。

——ベルグソンの時間論では、過去、現在、未来の三態は、意識の発達をまつて分化していくのだと説いています——。

池田　ベルグソンの時間に対する考え方は、非常に独創的だね。そして、きわめて仏法的だともいえるね。彼は、意識の本質は流れであり、「流れる時間」と表現している。この「流れる時間」というのは、私たちが物理的、客観的時間としてとらえてきた時間を「流れた時間」であるとし、それに対して、あくまで、意識というか、むしろ、生命の流れ自体をあらわしたものだね。だから、過去とか現在とか未来とかいう区分は、もともとあるのではなく、流れる意識がつくりだすものだということです。つまり、無差別から差別が生じるのだね。したがって、大自然を含む宇宙万物は、宇宙生命流のおりなす生命的存在といえるわけです。だから、私たちの生命流が強ければ、大自然へと積極的に働

きかけ、自然の営みを十二分におりこんでの生命活動ができるわけだ。いいかえれば、おのおのの生命に特有のリズムに生きながらも、自然の歩みとも調和していける。

人間のみならず、あらゆる生き物は、すべてそれぞれ各自の時間をもっている。しかし、人間生命ほど、生まれながらにして、豊かな生命流にめぐまれている存在はないと思う。それは、人間生命のみが、自然の律動と調和しつつ、それを超え、身体の流れと融合しつつも、そこから、意識、精神の多様な潮流を生みだしている事実を見れば、容易に納得のいくことだろうと思う。

——ところが、人間は、通常、そのめぐまれた生命流を十分には発揮できないでいる。いや、むしろ、生命の流れをみずからの行為によって弱めたり、速度をゆるめたりしていると思われます。力強く、速い生命的時間を感じ、そこに生きる可能性をたっぷりと秘めながら、あえて、苦しんでいるようなところもある。まったく、皮肉な現象ですね。

池田 そのとおりだね。

——そうしますと、私たちの實際生活にとって大切なことは、現在の瞬間をどう生きるか、という生命の姿勢ですね。

池田 現在という一瞬を充実させ、生命流の力を強めるか、それとも「妙法」としての宇宙生命からわきだす生命の流れの速度を遅くしてしまうか、ということだね。

瞬間の生に内包された「無限の宝」をうまく利用できれば、人生はかぎりなく豊かなものになるう。そのためには、まず、現在に含まれる過去の「記憶の貯蔵庫」を開くことだ。

そのカギをにぎっているのは、仏法の実践行為だと、私は確信している。信仰という、仏法の実践によって、人は、瞬間の生命の内奥に貯蔵された無限の過去をよみがえらせることができよう。その過去は、自己の体験流をのりこえて、万物の始源にまでのびていくはずです。しかし、こうしてよみがえった、「無限の宝」を、生の創造と充実に活用していくのは、個々の人間生命であることを忘れてはなるまい。過去を未来に生かす——その行為のなかにこそ、人

間の存在意義があるのではなからうか。

私たちが、いままで話しあつてきたように、未来もまた、無限の可能性をはらんでいる。ところが、皮肉なことに、人は通常、未来のはらむ可能性をできるだけ貧しいものにしようとしているかの感をうけざるをえない。絶望と断念と悲哀は、自己の前に開かれた未来を閉ざしてしまふであらうし、逆に、希望と決意と歓喜は、過去のもたらす「宝物」をうけいれつつ、かぎりなく豊かな未来を切り開いていくにちがいないと思う。

しかも、過去と現在によつて開かれた未来は、瞬時にして、現在の生をはぐくみつつ、過去へと去つていく。だが、過去へと過ぎさつた未来は、けつして永久に消えうせたのではなく、ただ過去のなかにしりぞいたにすぎないのである。現在の一瞬の生によつて、ふたたび、未来を生む原動力としてよみがえつてくる。

こうして、未来に想いをはせ、決意し、希望にあふれた人間の行為が、過去と未来を融合させ、現在の瞬間を充実させつつ、生命の潮流の速度を加速する

のでしよう。

——つまり、豊かな過去は、豊かな現在と未来を保証し、充実した現在と未来は、みずからを生みだす過去を、さらに豊かなものにしていく、というサイクルですね。

池田　だが、そのサイクルの始点は、あくまで現在、一瞬の生にある。一瞬の生を有意義に生きれば、そのなかに、無限の過去と未来が、ほとぼしる生命流の潮となって、現実の、私たちの生命をうるおしていく。そのとき、一瞬の生命に、永劫の過去と未来を内包した宇宙生命としての「妙法」が姿をあらわし、「瞬間」はそのまま「永遠」となる。つまり、「瞬間」のなかに「永遠」が立ちあらわれてくるということだね。そして、私たちの生命流は、宇宙生命のもつ大潮流と合体する。

——仏法で説く「瞬間即永遠」の意義ですね。

池田　瞬間の生に、永遠の实在をあらわすような現在を生きたいものだね。過去の「貯蔵庫」を開きつつ、希望と期待に胸をふくらませて未来を決意する。

その決意も、空間的にいえば、宇宙大に広がり、時間からすれば、未来永劫にわたるものでなければなるまい。しかも、万物を生みだし、育て、創造する宇宙生命の本源的な働きに沿う決意こそが、人間としての本来的な決意ではなからうか――。

さらに、具体的にいえば、人類と万物の、永劫の平和と繁栄をめざした決意であり、すべての生き物の苦悩を断ちきるところに目標を定めた決意であり、そこに、人間としての生きがいを見いだす使命感にめざめた決意が、過去を開き、未来を開くのです。

つまり、私たちの生き方は、過去に根ざしながらも、過去に生きるのではない。未来に想いをはせるあまり、現在の瞬間をおろそかにするのではない。未来に偉大な目標を定め、それにむかって決意し、未来を先取りしながら、使命感にめざめた現在の歓喜に生きたいものだと思うね。

宇宙の源流

宇宙はどういう姿をしているか

——前章では、過去、現在、未来という時間的な流れについて、少しく考察をくわえてみたわけですが、こんどは、われわれをとりまいている「空間」についてとりあげてみたいと思います。空間は、とくにわれわれの住んでいる世界そのものであるところから、過去や未来といった茫漠ぼうぼくとしたものでなく、たしかに「手応え」といったものがある。いわば「触れる」ことができる対象と関連づけられやすい。そのため、空間の性質は幾何学等の発達に見られるように、比較的早くから探られてきたように思います。

「宇宙」は、われわれをとりまく「空間」の極大の像であるといえるでしょうが、これについても、人類は古くから手探りしながら、その真実相を見きわめ